
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇
11
うこんのぎょうあん
破妖の剣
6
前田珠子
集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 11

前田珠子

集英社


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣 6

鬱金の暁闇11

前田珠子

集英社

目　次

鬱金の暁闇　11

第三十五章　原初の闇……13

第三十六章　落　日……101

夢の通い路……157

あとがき……195

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼしたラエスリールは、父の配下の魔性や紅蓮姫奪還チームに追われ、闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父の手によって仮死状態にされ、その肉体は紅蓮姫の「鞘」として浮城最奥に収められた。その後、紅蓮姫の第二の使い手として選ばれたのは、奪還チームの一人であるアーゼンターラ。そんななか誕生した第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、世界を破滅へ導こうとしていた。一方で死んだはずの母チェリクによってラエスリールの意識は永い眠りから目覚め、肉体へ戻る！　しかし、紫紺の妖主とアーゼンターラの闘いには間に合わず、雛の君はアーゼンターラの肉体から世界の破滅を可能にする『破壊の鍵』を取り出すことに成功！　ラエスリールは紅蓮姫を携えて雛の君に対峙するが、そこに現れたのは弟の身体に入った実父・金の妖主で!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白 **白焔の妖主(白煉)**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



紫 **紫紺の妖主(藍絲)**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

夫婦?

娘

息子



ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンタール(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイダード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

チェリク(リーク)
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

親友

夫婦

息子



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



濫花(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている



乱華(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主(千禍)
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

いいかんじ(?

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第三十五章　原初の闇

1

その瞬間が訪れる可能性があることは、この世に生まれ落ちた瞬間から知っていた。
否、存在自体に呪縛のように刻み込まれていた。
そのとき、自分がどう動くべきか、彼の意識とも魂とも存在とも――全てともいえる場所に刻み込まれていた。
だが、その可能性が著しく低いものであることも、彼は認識していた。
まずあり得ない事態であること。
人間の世における奇跡が幾つ重なろうとも不可能な、たとえそこに自分たちの関与があったとしてもまずあり得ない……『起こり得ない』事態に属することである、と。
だから、彼はその瞬間まで、その義務が我が身を縛ることを失念していた。
否――その事態が、その義務が、我が身にいかなる選択を強いるかを充分に認識できていなかったのだ。

そう……あの、刹那。

自分と同じ世界の要の一の命が消失した瞬間――。

創造主によって植え付けられた絶対の命が彼の存在を圧倒するまでは。

動け、と存在の隅々にまで刻まれた命が彼を支配した。

漆黒の雛はこの世に生まれ落ちた。

未だ微睡みのなかにある世界最後の要石にして世界の頂点に君臨する皇の所在を確認し、未だ無防備な状態にあるその存在を守るべく布陣を敷くのは彼にとって最優先事項だった。

無力なまま生まれ落ちる至高の皇を守るために行動を起こすことは、彼の存在意義にまで係わる重大事項だった。

それが起こった瞬間に、彼は自分の意志に関係なく、それを為すための行為を選択する――そのように、刻み込まれていた。

本体と呼べる器の損傷があれほどに酷くなかったならば、彼がこの選択をすることはなかったろう。

不意を突かれたのは事実とはいえ、彼はその事態を受け入れることを一度選んだ。

当時の彼にとって、それは大した問題となることではなかったのだ。

いくら傷つけられ、引き裂かれようが、彼の命に支障はなく、この世に存在することには何

ら問題がなかったからだ。

どれほど深い傷でも、時間さえあれば癒える。損なった力も世界が続く限り我が身に戻ってくる——時を支配する魔王の誕生以前に生を受けた彼には、その支配は及ばない。創造主の定めた時の流れが彼を包みこんでおり、それ以外の干渉は彼には及ばない。

そう……時満ちるのがあの瞬間でなかったならば、彼は何の問題もなく、彼本来の姿で創造主の刻んだ命に応じたことだろう。

だが。

あの瞬間——あの刹那。

すぐに動ける器はこのひとつしかなかった。

この器しか、なかったのだ——。

※

所用を済ませ、新たな女皇の居城に戻ってきた白煉は、その城内の気配の稀薄さに訝りを覚えると同時に安堵の思いも抱いていた。

間違っても誰かに見咎められたくはなかったからだ。

いや、誰か、ではない。
城の主を除けば、今自分とともにこの城に滞在している者はただひとり――その男に見つかりたくなかったのだ。
何を考えているのかわからない――読ませない男。
出会って以来、その印象が揺らいだことがない。
大がかりな遊びの準備に細心の注意を払い成し遂げたこともあれば、途中で気を変えて仕掛け全てを放棄することもあった。
また、自分を慕う配下たちなど無意味なものと扱うように見せて、時に深い情のようなものを垣間見せることもあった。
かと思えばその懐に入ることが叶ったと、心底喜ぶ配下を笑いながら切り捨てるような真似をしたことも一度や二度ではない。
強大な魔性たる身にありがちな、気分屋の一言では片付けられない、熾烈なまでの意識の豹変――溺愛にも等しい思いを注いでいた相手を、しかし一瞬で切り捨てる。
飽きたからだとか、思い上がった相手が逆鱗に触れる行為をしたからだというのなら、白煉にも覚えのあることだ。
傲慢であることは、圧倒的な力を与えられた者にとってごく当たり前に身についたものだ。

無力であることを知らず、またそれゆえに足掻くことも理解できない。

そんな自身に、力なき者たちが恐れと時に憧憬を寄せることは経験上いやというほど知っている。

気まぐれに拾い上げてやれば、そのことに心から感謝し、健気に尽くしてくる。

そのさまが可愛く愛しければ、褒めてやりさらに可愛がってもやる。そうしてさらに健気さを示せばそれなりに愛着も強くなる。

だが、彼らはただ可愛らしく健気であるだけの存在ではあり続けることができない……いや、ほんの少数は、そうであることができるのだが、大部分の者は途中で歪んでしまうのだ。

自らの力に対する奢りや自信なら、何とも思わない。

否、この自分の寵に係わるそれらでも、分を弁えさえすれば、不快になど思わない。

寵を競い合う可愛い配下たちの争いは、これまで何度も自分を楽しませてきてくれたのだから——だが。

その分を越えた場合、話は変わってくる。

寵を見誤った上で振る舞う傲慢さと我が身への過信——見苦しさを覚えると同時に、その配下への関心は薄れる。

一度で冷めることもないでもないが、大抵は様子を見ることで態度を保留する。

自ら、その過ぎたることに気づけるか否か——それを見極めるために。

気づかず奢り続けるなら、そのつもりなどなくとも関心は消え、相手は自分にとって塵芥と同じものとなる。

気づき言動を改めれば、この先長く愛せる可能性を秘めたモノとなる。

そうやって見極める。

それが自分の位置の取り方だ——恐らく自分だけでない、かつて三人はいたはずの同胞は、そうしていたのだと思う。

しかし、深紅を纏う男はまるで違う。

傲慢さを膨れあがらせる配下をどこまでも許す態度を見せるかと思えば、一度主の寵に縋っただけの配下を切り捨てる。

どこまでも傲慢さを膨れあがらせた配下の自滅を笑いながら見守り、自分が見放した配下が絶望の果てに命をすり減らし尽くすさまを楽しげに見つめ、なのに、さんざんに踏みにじった相手の行く末を見極めることすらせずに放置する。

魔性の王たる妖主という枠組みでは同じとされるはずの彼女にとってすら、かの深紅の魔王の言動は未だに読み取ることのできぬ代物であった。

何を読み取り何を思うのか、何を感じて何を決断するのか。

五人の妖主中、最後に生まれ落ちた故の経験不足だけが理由とは思えぬ、『読めぬ怖さ』があの男――『柘榴の妖主』にはある。

そう思うのは自分が女だからなのか、それとも五要としての新参者だからなのか。

悩んだ時期もあったが、白煉はその問いを放棄するしかなかった。

自分を除けば四人しかいない同胞の中に、同性はひとりしかおらず、しかもそのひとは、一つの身にふたつの人格を宿す混沌と矛盾を体現する存在だったからだ。

享楽的な翡蝶と女性らしからぬ質実剛健な熾翠。

出会う度に人格が入れ替わる先達の女性は、ある意味柘榴の妖主と同じくらい読み取りにくい、つきあいにくい相手でしかなかった。

それゆえに、翡翠の妖主を理解することを諦め、同時に柘榴の妖主に対しても同じ選択をした。

それが間違いだったとは思わない。

理解するということは共感を伴うものだ。あんなモノに共感する自分の姿など、当時の自分には想像できず、今となっては拒否感すら覚える。

だから、かつての自分の選択を悔いる気など欠片もない。

だが――この時期、この時。

迷いながらも動いた……動かずにいられなかったこの身をあの男に見咎められるのが恐ろしい。

何を思われようがそれはどうでもいい。

だが、底の知れぬあの男に、なにを何処まで見抜かれてしまうのか——想像することもできぬだけに恐ろしいと感じる。

魔性の王たるこの身が、真実恐怖を抱く日が来ようとは先日まで思いもしなかった。

想定できることは、脅威であっても恐怖を誘うモノではないのだ——真実恐ろしいのは、まるで先を見抜けないこと——完全なる闇にも似た未知を突きつけられることなのだと、白煉は痛感した。

今の自分を見て、あの男は何を思うのか——何を見いだすのか、何を暴き出すのか。

そして、どう動くのか。

知るのが怖い。心底恐ろしい。

だからこそ、彼の不在に安堵を覚えたのである。

が……しかし。

その時間は洩らした息ひとつほどの時間も許されなかった。

どこか気だるげな、今最も耳にしたくない男の声が耳に飛び込んで来たのだ。

「よりにもよって、こんな時期に出かけるとは、さすが白焔の妖主と言うべきか……」

隠すつもりもないのだろう、強烈な皮肉の棘をまぶした言葉を投げかけてきたのは、深紅の魔王だった。

呆れたことに、白煉の私室の扉を内側から開いての言葉である——そう、男は自分の不在時に勝手に彼女の部屋に入り込んだのだ！

他の誰にも——彼と同じ能力を勝ち得た女皇なら話は別だが——かなわぬことを、だが可能だとしても守るべき礼儀として他の誰しも控えるだろう暴挙を、平然と為した男への怒りが、この時白煉を助けた。

よりにもよっていまこの時の自分の不在を、他の誰でもない、何より知られたくなかった相手に知られてしまったという衝撃への動揺より、自身の誇りを傷つけられたことに対する怒りが上回ったのだ！

「貴様……ここでなにをしている？」

問いと白焔が放たれたのは同時だった。

怒りのままに放たれた焔は、与えられた私室をまるごと一瞬で焼失させるに充分な威力を纏っていた。

忠誠を誓った主の居城において許されるはずもない暴挙ではあったが、白煉は気にしなかっ

た——膝を折った相手は女皇であり、勝手に自室に入り込んだこの男ではないのだから。
男も一応は女皇に膝を折った、女皇の配下であり、配下同士の私闘もまた経験上許されがたい罪と見なされるだろうこともわかっていたが……こればかりは仕方なかった。
到底看過できる無礼ではなかったのだから。
いや、いっそここで柘榴の妖主を灼き尽くしてしまえば、主たる少女は逆に喜ぶかもしれない——男の読めなさに苛立ちを隠しきれない少女の姿を白煉もまた知っていた。
だが、決してそうはならないだろうことも、不本意ながら彼女にはわかっていた。
男は、時という、限りなく無敵に近い力を纏い、それを自在に操る存在だからだ。
果たして、彼女の放った白焔は男に届く直前に、時を戻され生まれなかったモノとなされた——何事も面白いほうを選ぶ性癖の男は、この究極の反則技を滅多に用いることはないが、今揮ったということは、女皇の居城を損なうことに対する配慮を働かせたと見なすべきか。
あるいは——。
他に何らかの意図があるのか。
読めぬ男の真意を探ろうと、白煉が意識する直前に、男は読ませぬための手を打ってきた。
「おいおい。せっかくお前が知りたがってたことを教えてやろうと思って足を運んでやったってのに、問答無用の攻撃はないんじゃないか？」

戯れ言だ。

そう判断するに充分すぎる前科を持つ男の言葉に、それでも白煉が反応したのは彼の常らしからぬ態度が引っかかったからだ。

罠以外で他者に見せたことのない気だるげな様子、それに加えて滅多に揮わない『時』の力――白煉の知る柘榴の妖主としては「らしくないことこの上ない」姿だ。

だが、同時にだからこそ警戒する気にもなる。

この程度の「らしくなさ」なら、この男は平気で罠に用いてくる。

滅多にないことだからこそ、罠である可能性は高くなるのだ。誠実さのかけらでもこれまで示されたことがあったなら、白煉としても少しは躊躇ったかもしれないが、何分誠実のせの字も男から感じ取ったことがなかったため、やはり罠だと判断する。

さて。

では、どう対応すべきか――どう、この男の動きを封じ込めるべきか。

ぞろり、と何かを引きずるような感覚とともに、思考がそのためだけに走り始める。

しかし白煉の最大限に発揮された警戒さえも、男の前では無力だった。

男は、告げたのだ。

「金の野郎がとうとう観念して姿を現したぞ」

と――。

女皇が雛の君と呼ばれる……否、その存在にすら自分が気づかぬ内から、彼女のために力を尽くし、彼女のための場所を整え、彼女のためだけに舞台を作り上げながら、これまで決して姿を現そうとしなかった、この世界に最初に生まれ落ちた最初の――最古の者。

王蜜の妖主。

他者に頭を垂れることを決してよしとしない、同じ世界の王のひとりとして生を受けた身であっても、最低限の敬意と尊崇を抱かずにはいられない、ただひとりのひと。

最初に女皇に膝を折ったとされながら、今の今までその姿を同胞の前に決して現そうとしなかったそのひとが、自ら出て来たと聞かされて。

白煉の怒りが小さく萎んだ。

否、それ以上に大きな興味が彼女の胸に湧き上がったのだ。

乗せられた。

まんまとしてやられた。

悔しい――堪らない。

だが、それでも。

知りたいという欲に、白煉は逆らえなかった。

絞り出すように、彼女は声を紡いだ。
「何を言いたい？」
投げ返された言葉は簡潔そのものだった。
「その目で見るがいいさ」
そうでなければ、お前は納得しないだろう？
言外に告げられた言葉までもがもっともで、反論するより白煉は男に促されるまま、知りたかった事実を知ることを選んだ。
招じ入れられた自室の中心に、仮初めに置かれた見知らぬ遠見鏡――時の力を帯びたがゆえに、いかなる魔力のまやかしも通じぬその鏡に映し出された真実に、白煉は呻いた。
「……だからか」
男は答えない。
だが、目にした光景がある以上、彼女にとって疑問の答えは明らかだった。
「……この罪を隠すために、彼の君は身を潜めてらしたのか……？」
そこで白煉が目にしたのは、彼女の常識ではあり得ない、決して許せない現実だった。
だが――。
彼女にとっては許し難い罪も、彼女の理解の外に在る男にとっては違う意味を持っていたの

かもしれない。
だから、彼女には知りえぬ答えを返したのかもしれない。
単なる戯れ言であったかもしれないが。
結局のところ、彼女が得たのは答えとも答えともつかないとも……どうにも判断できぬ代物だった。
「どうかな」
素っ気なさ過ぎる男の一言に、怒りを爆発させかけた白煉は、しかし男の表情ゆえに思いとどまった。
その表情が告げるところを、不本意にも読み取れてしまったがことのせいだった。
後はこいつら次第だ。
声にならぬ苦しげな声を、ざわめく耳が拾い上げたような気がした。
そんなもの、聞きたくも知りたくもなかった。
だが、男は突きつけてきた。
否応もなく、選択の舞台に引きずり出されたことを、白焔の妖主白煉は意識した。
この男、殺してやりたい――。
強烈なまでの殺意を抱いた。

2

世界は常に揺らぎ続けている。

揺れて、流れて、変化し続ける。

認識としては知っていたその真理を、乱華が肌で感じるようになったのはここ最近になってからのことだった。

最愛にして最も憎むべき——思うがままにならぬ姉の左目を抉り取ったのは、彼女を傷つけることで思い知らせたかったからだ。

昔から自分の最愛の座を揺らぐことなく摑み続けておきながら、そのくせ何一つ自分の思い通りにならない……なってくれない姉への苛立ちと思いを。

永遠に彼女を喪ったのだと思った時、この心に吹き荒れた嵐がどれほど苛烈な冷気を伴い、この身を突き刺したことか、奇跡のような偶然で再会した時の互いの立ち位置の違いに、どれほどこの心が引き裂かれたか。

自らの力不足ゆえに、あの時姉の声を拾い上げることができなかった。
自分にもっと力があれば、姉が必死に声を上げて山中を駆けている時、それに気づくことができたのではなかったろうか。
何度、そう思い、そうできなかった自身を悔いたことかしれない。
頭ではわかっている。
あの時の襲撃は、父ですら気づけなかった。
父の腹心の配下が、気配を練りに練り、消して、散じて、決して気取られぬよう計算して為された暗殺だった。
狙われたのは、父を「誑かした人間の女」とその付属物――その中には自分の存在も含まれていたはずだというのに、襲撃を生き延びたという事実だけで、魔性たちの対応は変わった。
生き抜いた――それだけで、劇的に対応が変わったのだ。
金の若君、王蜜の若君――褒めそやされ、認められ、自分は父の後継としての地位を得た。
たったひとつの奇禍から逃れ得たかどうか――それだけで。
生き延びた自分は認められ、生き延びられなかったとされた母と姉は父の配下たちの記憶からさえあっさりと切り捨てられた。
あの時の、胸に湧き上がったマグマのような衝動は、決して忘れられない。

生き延びたから自分には価値があるのか。
あの襲撃で命を落とした母や姉には何ら価値がないのか。
今ここに命があるかなしかに、そこまでの意味があるのか。だとしたら、その根源にある規定は何なのか。
母と姉が命を落とした。
それはなぜか。
無力だったからだ。
すとんと胸に落ちた答えに、乱華はたまらないまでの憤り(いきどお)を覚えた。
力が足りないということは、かくも無残(むざん)に命を散らされる理由となるのかと。
自らが無力であろうと、他者たる自分に微笑(ほほえ)みひとつで力を与えた姉は真実無力と呼ぶべき存在であったのかと。
自問の答えは感情が導き出した。
そんなことがあってたまるものか、と――！
どんな理由があろうとも、そんなことのために姉の命が奪われていいはずがない！
不条理だ。
この現実はあまりにも不条理だ！

姉が死ぬなど――死んで終わりなど、どうにも不条理だと。
心は叫び続けていたのだと思う。
そして、その心の叫びに応えるように、ある日奇跡の扉が開かれた。
死んだとばかり思っていた姉が生きていた。
その喜ばしいはずの事実を刃に変える在り方で――。
かつて無力を嘆いた少女は、眷属を葬る剣を手に、自分より遙かに強い魔性の王を傍らに、敵として現れた。
あの時の怒りと苦しみは到底忘れられるものではない。
引き裂いてしまいたかった。人間などに与した裏切り者だからではなく、自分ではない誰かによって生き延びてきた――その裏切りゆえに。
それでも、焦がれる思いは断ち切れず、断ち切るために何度彼女に力を放ったことか。過去の残滓を消し去れば、心の嵐は去るに違いないと心に言い聞かせ、無様に命乞いをする姿を目にするために傷つけ続けた。
無力で優しかった姉が、見るに堪えない醜態を晒してくれれば、これは自分が愛した少女ではないと思い切ることができる、と……。
だが、どれほど傷つけても、彼女の心は折れなかった。

立ち上がることができぬまでに打ち据えた時ですら、彼女の双眸は光を失うことはなかった——過去よりもずっと強くなった眼差しで、変わらず真っ直ぐ自分を見つめてきた。

残滓などとは到底思えなくなった。

生きている。

確かに生きている姉——けれど彼女は自分のそばにいない。そばに来ようとすらしない。

ならばいっそ、追いかけて来させたかった。

瞳を奪い、追いかけて来た彼女を捕らえ、その意思など無視してそばに縛りつけたかった——自分を拒むならその舌を切り、逃げだそうとするなら足の腱を切り、自分以外を求めるために手を伸ばすならそれも切り捨ててしまおう。

昏い誘惑に身を任せかけた乱華を、しかし新たな姉が引き留めてくれた。

翡翠の妖主によって生み出された姉の守護者——緋陵姫の存在は、飢えと渇きに満ちた心を優しく慰撫してくれた。

彼女がいなければ、この心はとうに混沌の闇に沈んでいただろう。

失えない——自分は緋陵姫も失うことはできない。

だが——。

白砂原の外れの館で意識を失った姉は、雛の君の居城たるこの城に戻ってもなかなか回復の

兆しを見せない。

母であるチェリクに見せた彼女の怯えを思えば、あの時母が何かをしたのだと考えることもできる。だが、恐らくそうではないことを、乱華は不吉な予感とともに感じていた。

母の鋭い眼差しに、彼女は怯えたのだ。

何かを暴かれることを――そして、それを自分に知られることを、何より恐れた。

緋陵姫の抱く秘め事を、乱華は無理に暴こうとは思わない。必死に隠すのが彼女の意志であるならば、それを挫いていいわけがない。

それでも、言いようのない不安が胸に広がるのを止められない。

「姉上……」

憔悴した顔を見る度、黒い雫がぽとりぽとりと落ちては染みを作っていく。

「……わたしに、何かできることはないのですか？」

それまで目を瞑っていた緋陵姫の瞼が、ぴくりと震えた。

ゆっくりと持ち上がった瞼の奥にあるのは一粒ずつ色の違う瞳だ。

姉とは違う、だが乱華にとっては同じぐらい掛けがえのない色違いの宝珠。

「……あまり、不安そうな顔をするな。底意地の悪いどこぞの魔王につけこまれるだけだぞ？」

皮肉な口調で告げられた内容に、乱華は思わず眉宇をひそめた。

「あの男のことを持ち出すのはやめてください」

自分の知らぬ間に、ちゃっかりもうひとりの姉の隣に居座った男のことを、この姉までが口にするのは我慢ならない。

不機嫌に曇る瞳を緋陵姫がおかしそうに見つめている。からかわれたのだと気づき、さらに機嫌が降下するのを自覚する。

「だが、乱華。雛の君が完全な皇になられた以上、あれの封印は早晩解かれるぞ。今度こそあの男に先を越されないためにも、つけいる隙は極力見せぬことだ」

それは確かに事実だった。

新たな破壊の鍵を手に入れた漆黒の妖主は、先ほど皇としての完成を見た。

そうである以上、最初に生まれた鍵を持つラエスリールにはもう意味がない——彼女を皇から守るために封じる必要も最早ない。

そうなれば、あの男が彼女の封印を解くために動くのは火を見るよりも明らかであり、その先手を取るためにはこちらはより細心の注意を以て行動する必要がある。

「そうですね。ラスにはできるだけ長く眠っていてもらいたいところですし」

女皇が放った高らかな宣言——新たな世界に人間は生まれないという内容を、あの姉は決し

て看過できぬだろう。
だから、全てが終わった後に、彼女には目覚めてもらいたい。それまでは……できるだけ深紅の魔王の妨害に徹したほうがいいだろう。
なにやら後手に回っているような気がして不愉快だが、目覚めたラエスリールが女皇に戦いを挑むようなことになっては困るどころの話ではないのだから、仕方ないと割り切るべきだろう。
そう無理矢理自身を納得させようとする乱華は、緋陵姫の双眸が驚愕に大きく瞠られるのに気づき、首を傾げた。
「姉上？」
彼の呼びかけにも気づかぬように、緋陵姫は呆然と宙を見つめて動かない。
震える唇が刻むのは「なぜ」の一言。
「姉上、いかがなされたのです⁉」
尋常でないその様子に、乱華の胸に新たな不安が生まれ落ちた。
「姉上⁉」
再度の呼びかけにも緋陵姫は反応しなかった。
しかしその唇から洩れる声が、彼女の動揺の理由を明らかにする。

「なぜ璃岩城に……いや、いつ目覚めたのだ!?　父上が解呪なさったのか？　早すぎる……まだあれが目覚めるのは早すぎるというのに、なぜ……!?」

混乱した口調で綴られる内容に、乱華の胸が大きく脈打った。

目覚め、父上、解呪――そして「あれ」。

何が起こったのか、察するには充分な言葉だった。

だが、衝撃はそれだけにとどまらなかった。

緋陵姫が悲痛な声を上げる。

「父上っ!?」

「姉上、父上がどうなさったのです!?」

問いかける乱華の腕に、緋陵姫の細すぎる指が伸び、痛みを覚えるほどの強さで喰い込んでくる。

「乱華！　頼む、父上をお止めしてくれっ！　父上が璃岩城に向かわれているんだ！　このままでは、あのお姿のまま、あれと会ってしまう！　そうなる前に、どうか乱華、父上をお止めしてくれ！」

心臓が、凍りつくかと思った。

同時に、諦めにも似た静かな思いが胸を満たした。

ああ、ついに……。
罪が露見する時が来たのだ――。

※

ラエスリールにとって懐かしいそのひとは、思いがけぬ気迫を纏い、思いがけぬ姿で突然現れた。
母を喪った数日後、生まれて以来離れたことのない土地を自らあとにしたあの時――最後に姿を目にし、言葉を拾った……そう、もう十年以上過去のあの時。
黄金の化身としか思えぬ姿をしたこのひとは、静かに自分を見つめていたのだ。
その前に味わった衝撃的な事実やこのひととの遣り取りより、そちらを思い出してしまうのは、このひとの眼差しが一番印象的だったからだと思う。
静かな、静かな――山中深く誰も知らぬ湖の水面を思わせる目で、このひとは自分の背中を見つめていた。
人間として生きよ、と告げ――それが亡き妻チェリクの願いである以上叶えぬわけにはいくまいと……何かを見いだし驚いたことを圧して「行け」と命じた。

あの時、父への怒りを覚えることがなかったのは、ずっと、その直前に何かを――恐らくは朱烙を封じられた衝撃の余波によるものだと思っていた。

母を喪い、その直後に母によって封じられ続けてきた朱烙が解放され――さらにすぐ、それを父たるひとに封じられた。

嵐のような急速な事態の変化の中、施される度重なる無理。

心は絶対的力に抗うことはかなわず、だがその事実はあまりにも大きく重く、しっかりとうけとめることさえできなかった。

けれど父の言葉にならない「行け」という思いだけは、言葉以上に雄弁に告げられた意志だと信じて疑わなかった。

その頬に流れ落ちる涙を見たという思いも、期待が見せた錯覚だったかもしれない。

そうと思っても、あの時の父の姿だけはラエスリールにとっては絶対で、決して何者にも覆すことなどできない絶対の真実で――。

けれど。

十余年を置いて、再会した父は、彼女の中に刻み込まれたあらゆる真実を覆すに充分な姿を気配を漂わせている。

今自分を映す彼の人の瞳には、かつて垣間見せた家族への情のひとかけらさえ見て取れない。

母への愛も、より色濃く自身を継いだ息子への愛着も、無力に生まれた自分への欠片のような情けさえも。

「父さま……」

揺るぎない、黄金の双眸に浮かぶのは、確固たる決意。

自分はおろか、弟や母までも切り捨てることに躊躇いを持たぬ、超然たる決意を固めた揺るぎない眼差し――。

全身全霊で、漆黒の女皇を守らんと――この場に出現した彼の存在そのものがそう叫んでいる！

「父さま！」

それがわかっても、ラエスリールは呼ばずには、問わずにはいられなかった。

家族への情を上回る何かが父にはあるのだと……あったのだと、否応なく思い知らされる状況にあってなお。

それでも――どうしても。

なぜ、そこまでしなければならなかったのか、と。

「父さま！　なぜです……なぜ、あなたがリーダイルの体に宿ってらっしゃるのです!?」

投じた問いへの答えをどこまで求めているのか――。

ラエスリール自身わからぬままに問いは放たれた。
しかし、その問いに対する答えは返らなかった。
王蜜の妖主は表情ひとつ変えることなく、ラエスリールの叫びを切り捨てたのだ。
なぜなら、彼が最初に見つめた相手は娘（ラエスリール）ではなく、かけた声も彼女に対するものではなかった。
「雛の君……いえ、女皇。皇たる身となられましたこと、心よりお祝い申し上げます」
必死に問いかけたラエスリールの存在など塵芥（ちりあくた）も同然とばかりに、王蜜の妖主は漆黒の少女に恭（うやうや）しく頭（こうべ）を垂（た）れて告げた。
濡れたような漆黒を纏（まと）う女皇は、それを当然のものとして受け入れる。
「ありがとう、一の君。あなたにそうと認められるのは格別の感慨（かんがい）があるわね」
ふわりと浮かぶ柔らかな微笑――安堵（あんど）の混じるその笑みには、絶対の自信がより強まった形で宿っていた。
完全なる存在となった少女は、にこやかに笑いながら、王蜜の妖主に問いを投げた。
「ところで、一の君、どうしてこの時、この場所にいらしたのか尋（たず）ねてもいいかしら？」
燃え上がりかけた戦意の焔（ほのお）に水を差された格好（かっこう）になった少女の双眸には微（かす）かな苛立ちの色がある。

全魔性に君臨する身である彼女にとって、王蜜の妖主の登場は予想外であるばかりでなく、本意ではなかったらしい。

ちらりと浮かぶ不快げな光に、しかし父であるひとは揺らぐことなく頭を垂れ、答えた。

「無論、第一はお慶び申し上げるため……そして、第二は――」

冷ややかな、温度というものを一切含まぬ眼差しをラエスリールに向けて、彼は続けた。

「至高の御身に相応しからぬ軽挙に走られることをお止めするためでございます」

「軽挙」

金の化身の紡いだ言葉のなか、ただ一語を拾い上げ、女皇は舌の上で転がすように繰り返した。

「それは、一の君の娘御と手合わせすることを言っているのかしら？」

声に宿る微かな憤りは、存在の強大さゆえに増幅され、主を失った璃岩城を震わせた。

「聞き捨てならぬ言葉だわ、場合によっては一の君、あなたといえど許し難く思うほどに」

あなたはまさか、わたしがあなたの娘御に後れを取るとでも思ってらっしゃるの？

苛立ちに過ぎぬ思いが、微かながら怒りに転じようとしていた――いかなる者に対しても自身への侮りを決して許さぬ意志が空間そのものを支配し、その場にいる全員の皮膚を突き刺した。

それは、ほんの小さな感情の揺らぎに過ぎない。

それを、ラエスリールは肌で感じ取っていた。だが、そのごく微妙な揺らぎですら、この璃岩城を崩壊に導くに充分な力をたたえているのだ。

いつまで子供扱いする気なのか、と年長者に対して覚えた小さな怒り——それだけで、主を失ったとはいえ、長年にわたり紫紺の妖主の力を注ぎ込まれ続け、構築されたこの城の存在を脅かす。

恐ろしい力だ。

感情が小さくぶれただけで、それだけの破壊力を放つのだ。

このぶれが、さらに大きく育ったならば——。

それはない。それはないとラエスリールは確信している——女皇は勘違いしている。王蜜の妖主たる父がこの場に現れたこと、その意味を。

彼女は勘違いしている。

親子の情で、彼がここに駆けつけたのではないのかと。

血を分けた娘であるラエスリールの助命を図るために、わざわざこの瞬間に飛び込んで来たのではないのかと。

だが、それは違う——違うのだ。

この世に生まれて二十と数年――父と接した時間はその半分ほどしかない。
父たるひとの何をどこまで知っているのかと問われれば、ほとんど何も知らないとしか答えようがない。
それでも。
わかるのだ。
このひとがこの場に現れた意味――理由。
それは正しく彼の言葉通り、「女皇の軽挙を止めるため」であることが！
身内の情というものを、綺麗にそぎ落とした気配をたたえた彼の姿、その眼差し、娘にはかけらも向けることなき関心。
昔と同じ――否、それ以上の無関心さで、父は自分をただそこに在るモノとしてしか認識していない！
十数年前に父が見せた情の欠片――あれは、これきりという決意あってのものだったのか。
あの瞬間を以て最後に、父は自分への情を完全に断ち切ったのか。
否、自分だけでなく――もしかしたら弟へのそれすらも……？
父さま。
そう呼びたかった。

そして、自分に対してはともかく、リーダイルに対しては誤解ですよねと尋ねたかった。
出来損ないの自分とは違い、弟は優秀すぎるほどに優秀だった。
父は常に弟を伴って出かけ、弟はその度に新たな力の使い方を教わったのか嬉しそうにラエスリールに報告してきた。
自分の無力さに悄然とする彼女を励ますために、彼は力を蓄え続けた。
『ラスが気にすることなんて、何もないんだ』
『だって、きっと、ラスを守るためにぼくはいっぱい父上の力をもらったんだと思うから』
だから、ラスのためにこの力を磨いていっぱいいっぱい育てて、それでぼくはラスを守るんだよ。
母そっくりの緑柱石の双眸をきらきらと輝かせてそう言っていた弟。
その弟の肉体に、今宿っているのは――。
冷然たる眼差しを揺るがせることのない、自分たちの父親だ。
これは何だ。
この状況に意味するところは⁉
考えたくない。
けれど、その意味は明確だ。

父は――。
世界の理に則り、このひとは――父は。
息子でなく娘でなく、亡き母への愛や情でもなく。
目前にいる漆黒の世界の女皇をこそ選んだのだ！
身が凍るような思いがした。
女皇自身すら気づかぬことに先に気づいてしまった衝撃ゆえだろうか――ひとかけらの「もしかしたら」という期待を、一切望めぬことに気づいてしまったせいだろうか。
言わないで――答えないで、せめて。
ラエスリールの心に嵐が吹き荒れる。
自分はともかく、母や弟への情が欠片でも残っているなら。
決してその言葉だけは――自分の中の、彼のふたりに対する想いを吹き消すような言葉だけは絶対に。
言わないで！
ラエスリールの中の幼い彼女が必死に、懸命に、縋るように、祈りとも願いともつかぬ声を送り続けたにもかかわらず――。
無情にも、そのひとは女皇への問いのみに答えた。

「いいえ、我が君……至高の君。至高たる身なればこそ、あなたは軽々にこのような場所で、このような相手に力を揮うべきではないと……そう申し上げたいのですよ」

言外に告げられる内容は、「この程度の輩」というもの。

ラエスリールの心臓が凍りつく。

父の言葉は、彼の認識をそのまま映し出していた。

相対する相手への、彼の正直な評価として。

「皇たる身が相手をするには、これは相応しくございません」

冴え冴えとした声は断じる。

これは――自分は、至高の身が相対する価値などないものだと。

「御身は、このような輩に係わるべきではございません。この言上をお聞き入れいただくために参上いたしました――」

完全に、完璧に。

自分が父に切り捨てられたのだと、ラエスリールは知った。

自分だけでなく、母も弟も――家族だと信じた時全てを含めて。

要らない。

要らなかったのだ、と。

突きつけられたのだと思った――。

3

予想していた。

確信すら、していた。

父は自分のためではなく、新たに生まれた女皇のためにこの場に駆けつけたのだと——微かな期待を差し挟む余地すらなく。

だから、その瞬間を迎えたとしても、衝撃に動けなくなることはないだろう……心のどこかで思っていたことは、今この時、完全に裏切られた。

息子であるリーダイルの肉体に宿り、娘たる自分を冷ややかに見つめながら、父たるひとはどこまでも最後に生まれた唯一の皇の臣下としての振る舞いを崩さない。

全身が凍りつくような錯覚に見舞われる。

父さま。父さま。

子供だった自分が胸の奥で泣きながら叫ぶ。

父さま。父さま。父さま、と……ただひたすらに。
わたしは要らぬ子供だったのですか？　無力だったからですか？　母さまを守れなかったからですか？　わたしという存在は、父さまにとっては本来気にかける価値の欠片も見出せぬ塵芥に過ぎなかったのですか……？
母さまへの情だけが、あの日……最後のあの時、わたしにかけられた声を支えるものだったのですか……!?
知りたい。
同時に知りたくない。
否と告げられたとしても、今この状況では信じられない。
その通りだと応えられたら、指先ひとつ動かすことさえできなくなりそうだ。
そもそも不出来な娘だった自覚はある。
王蜜の妖主の娘としての充分な資質や力があったなら、父は弟とともに様々な力の使い方を教えてくれていたに違いない。
魔性にあって、男女の差別はない——あるのは力そのものに対する絶対的評価だ。
自分は父の評価に値しなかった。
それだけが絶対の真実だ。

わかっていた……そうと知っていたはずの事実を、今父が証明した。
それだけのことに過ぎぬというのに、心は凍りつき、指先ひとつ自由にならない。
わかっていたことだろうと、いくら宥めても泣き止まぬ心は悲鳴を上げ続ける。
父さま、父さま、父さま、と！
それは、自分で勝手にわかったつもりでいただけのことだからだ。
わかったつもりで、自分の中で無理矢理決着をつけていた。
実のところは何もわかっていなかった。
父に評価されず、意味がないと切り捨てられる衝撃も現実も——実際にそう扱われたことさえなかったこの身は、想像することでしか、それを補うことができなかった。
かつて一度として評価されたことのない身が、認められる夢を元におぼろげすぎる砂上の楼閣を心の中に築き上げていた。
自分が……多少の力を得たのではないのかと。
紅蓮姫を得たことで、またその戦いの中で育んだものは、幾ばくかでも父の心に届くのではないか、と。
己も知らずに思っていたことを、切り捨てられた今、はっきりと自覚した。
父さま、父さま、父さま——！

あなたに認めてほしかった。あなたに微笑んでもらいたかった。
欲しかったのは、たとえ過大なものだとしても――。
「よくやれたな」
「さすがわたしの子だ」
――わたしの子だ。
間違いなく、お前はわたしの子供だと――。
ただその一言が、一言だけが欲しかったのだと今にして悟る――絶望とともに。
父は言わない――その一言を。
決して口にすることはない。
突きつけられた真実に、ラエスリールは自身がいかに飢えていたかを知り、同時に絶望に襲われた。
父がその言葉を口にすることは恐らくない――欲しい言葉は得られぬまま、泣き続ける子供は満たされることなく慟哭に支配される。
明けることのない闇の絶望。
冷たく乾いた闇の触手が、ラエスリールの心をじわじわと締めつける。
ああ、駄目だ。

渇きがより強くなる——癒されることがないと知った心を、闇はなおも渇かせようとする。
凍えた心が、より強い冷気……否、凍気に晒されさらに凍りつかされていく。
駄目だ、駄目だとラエスリールは自身を叱咤する。
父を前にしたぐらいで、動けなくなる程度の決意で、自分はここにいるのか、と。
そもそもここに来た理由は何だ。
自分が空けた空の大穴——虚空の覗くあの穴から生まれ落ちた破壊の化身によって、利用された少女を救うためではなかったのか。
彼女の命を奪還し、さらに目前の少女の目的を阻止するために、邪羅に無理を言ってまで駆けつけてきたのではなかったか。
父の言葉に眼差しに、傷ついて動けなくなるぐらいなら、自分がここに来た意味などない。
動け——動くのだ。
自分の心に必死に鞭打つ。
このままでは、誰も救えず、何も変えられない。
過去に縛られ、現実を突きつけられただけで呆然としているだけでは、本当になにも。
わかっている。
わかっている、のに——。

渇き切った心は、無風の砂漠のように、砂粒ひとつ動こうとしない。
凍りきった心は、微細な振動さえ起こそうとしない。
思いが、心にも体にも伝わらない……動けない。
右手に握る紅蓮姫の声すらも、虚ろに通り過ぎるだけだ。
繋がらない。
動かなければならないという意志はあるのに、心と体の回路に、どうしてもそれが繋がらない——伝わらないまま、木偶のように動けない。
こんなことは初めてだった。
こんな風に意識と心、体——全部が完全に乖離してしまうことなどこれまでなかった。
これではいけないと、痛いほどにわかっているのに、どうしても心が、体が動かない。
どうしたら……どうしたらいい。
泣きたいほどに自身が情けなく、不甲斐なく思えるのに、立ち尽くすしかできない自分に絶望だけが募っていく。
皇たる少女と戦う覚悟すらしていたのが嘘のように、父であるひとを前にしただけでなにもかもわからなくなってしまう。
動かなければならないという理由ならいくつだってあるし、そのどれひとつとして切り捨て

られるものではないというのに――！

どうして。

どうして、この心は――体は。

渇いて凍えて、応えようとしてくれないのか。

わからない。なにもわからない。

わなわなと震えながら、ラエスリールはただその場に立ち尽くし、ただ父と女皇を見つめるしかできない。

無様だ。

深紅の男を奪い返すと心に決めた想いさえも、父の冷徹な眼差しひとつで簡単に動きを緩めてしまう。

これほどに、支配されていたのだ。

心も体もばらばらにされるほどに、自分は父という存在に呪縛されていたのだと。

今この時になって、ラエスリールはその事実を突きつけられた。

このひとに不要と断じられれば、心は否応なくそれに従ってしまう。これまで生きて来られたのは、このひとに生きることを許されたからだ。

このひとの許可なくば、息ひとつつくことさえ――。

できないに違いない。
それは現実に父が施した呪縛ではない。
父が自分に直接強いたことではない。
そうではない――そうではない、けれど。
自分で、自分をそう定めた。幼い自分がそう定めた。
どうしようもなく父に焦がれた自分自身が。
自身のかけた呪縛に捕らわれ、今自分は指先ひとつ動かせずにいる。
駄目だと思うのに――これではいけないとわかっているのに。
このひとの姿を目にするそれだけで、この身は容易く自身のかけた呪いで自らを縛りつけるのだ。
心の奥で響く幼い子供だった自分の声。
『父さま、父さま、父さま！』
実際に声に出して訴えられなかった叫びが。
今もこの身を縛りつける。
『わたしを見て！　わたしも見て、母さまやリーダイルだけじゃなくて、わたしも！』
見て欲しい。

そして、欠片でもいいから認めてほしい。
自分もいるのだと。自分もここにいるのだと。
母の望みゆえに生き延びることを許してくれた——それはわかっている。
痛いほどにわかっている。
けれど——本当は。
本当にラエスリールが欲しかったのは。
母や弟（リーディル）が気にかけているからという理由ではなくて、父そのひとが自分に……他に何の理由もなく向けてくれる関心だけだった。
本当に、ほんのひと欠片でもよかったのだ。
それさえ感じ取ることができれば、ラエスリールの心の渇きは癒されていただろう。
だからこそ渇望（かつぼう）し、同時に、絶望せぬために遮二無二（しゃにむに）それを求めることを自（みずか）らに禁じた。
禁じた分だけ抑圧は大きくなり、望みも大きく育ってしまった。
そして、今——。
その望みは完全に絶たれてしまった。
他でもない彼自身の眼差しと声と言葉が、ラエスリールのなかに残っていた期待の欠片を切り捨てた。

彼のひとは、選んでしまった。
最早自分が彼のひとの眼差しを受けることはない。
世界の大事を前にして、この程度のことで挫けるのかと、ラエスリール自身、自分を叱咤する――何とか切れてしまった心と体とこの想いを繋げようと必死に抗う。
だが、できない。
繋がらない。
駄目だ、駄目だ、このままでは駄目なのに――。
焦る気持ちが心身に伝わらない。
伝えるための橋がない。
一本の丸太でも構わない――なのに、それが彼女の世界のどこを探しても見つからないのである。
駄目なのに。
駄目だとわかっているのに――！
絶望にラエスリールの心が塞がれる――まさに、その寸前。
怒りに震える声が、璃岩城に響き渡った。
「っっっっざけんなっ！」

破妖刀夢晶結とともに、人間を魔性から護り続けてきた女破妖剣士――スラヴィエーラの激烈なまでの怒号が！

「ふざけるな！　ふざけるな！　ふざけるな！」

怒りに支配された女性が、燃えるような眼差しを、父であるひとに向けながら、何度も「ふざけるな」と繰り返す姿を、ラエスリールは呆然と見ていた。

見ていることしか、できなかった。

4

ラエスリールを嫌う浮城の人間は少なくない。
その複雑な出生ゆえに、彼女の纏う気配は常に安定せず、時に不気味に、時に恐ろしく変化するためだ。
浮城史上最強の魅縛師と妖主の間に生まれた娘――。
人間の側に立つなら、この上なく力強いが、逆となればこれほど危険な存在はない。
彼女が間違いなく人間の側に立つと信じるには、彼女が浮城に引き取られる以前の経歴が邪魔をする。
我が身大事の人間に、魔性の贄として差し出されたことを、果たして彼女はどう捉えているのか――人間に対する不信感が、まるでないはずはない。
それはいったいどれほどの強さで彼女の心に根付いているのか。
また、その心のありようは、本当に自分たちと同じと信じていいものか。

母親こそ人間だが、彼女は妖主の娘として生まれ育ってきたはずだ。その環境のなかで、ごく当たり前に魔性としての在り方を学び、心に刻んでいるのではないのか。

そもそも、彼女の母親自身、人間であることが間違いではないかというほどに規格外れの力の持ち主だった。

その言動も、人間らしからぬものも多かった。

鬼子と呼ばれた母親は、彼女の実質的な養い親である破妖剣士の教育のおかげで、二十歳を前にするころには随分人間らしくなった。弱者を思いやり、守るために自らを盾とすることに躊躇いなく、自らをも守ることで、次なる弱者の救済に繋ぐ。

表面だけ見れば、浮城の人間として申し分ない理想の人物といえた。

だが、彼女の過去の姿を知る者たちにとって、それが彼女が真実人間としての意識に目覚め成長した結果なのか、それとも養父の薫陶を上辺だけなぞったものにすぎないのか、知るがゆえに逆に不信を禁じ得ない。

そんなチェリクと妖主の間に生まれた娘――。

すでに人間の弱さゆえの狡さに殺されそうになった娘。

容易く信じられるものではない、と事情を知る者は警戒し、その空気は何も知らぬ浮城の住人にまで伝わった。

上層部がどうやら警戒しているらしい娘――ならば、なにか問題を孕んでいるに違いない。
そういえば、あの娘は時折異様な気配を放つことがある。
あの娘とはなかなか満足に会話が成立しない。
何を考えているかわからない無表情で、限られた一部の人間しか相手にするつもりがないとしか思えない。
上が警戒するのも頷ける、どこか気持ちの悪さがある。
単に自分の思いを外に出すのが苦手で、言葉ひとつとってみても、過分なまでに考え込んで、結果返すタイミングを失してしまう不器用な子供は、先入観という鱗を目に貼り付けた者たちによって、次第に周囲から浮き上がっていった。
孤立という状態にならなかったのは、彼女を理解し、根気強くつきあう人間がそばに数人存在したからだ。
その筆頭が当時の城長であるマンスラムであり、人気のある捕縛師ふたりであったことは、ラエスリールにとって幸いであったには違いないが、別の意味で不幸だったといえないこともない。
なぜ、城長さまが。
なぜ、サティンが、セスランが。

あんな子供に心を配るのか。

そんな価値が、果たしてあの子供にあるというのか。

他愛ない嫉妬も、数が募れば侮れない力となる。

さらに止めとばかりに、四十年もの間沈黙を守り続けた浮城最強の破妖刀――紅蓮姫が彼女を選んだ。

飢えに飢えを重ねて、それでも誰も自らの使い手として選ぼうとしなかった真紅の破妖刀は、破妖剣士候補ですらなかった半人半妖の子供を選んだ。

浮城の護り手たちは、自らの命を優先して、誰も彼女につこうとはしなかった。最強の破妖刀に選ばれても、護り手なしには仕事に赴くことはできない。

そのことを笑い話に取り上げる破妖剣士は多かった。

気の毒に――いくら最強の紅蓮姫に選ばれても、護り手がつかねば意味がない。

宝の持ち腐れというものだ。

笑い、ラエスリールを揶揄することで、彼らは溜飲を下げていたのかもしれない――自分たちの誰も、選ばれることがなかった浮城最強の証は、結局使い手を選んだところでその力を発揮することはできないのだと。

本能的な違和感、過去に囚われるがゆえの猜疑、何となく伝わる周囲の空気、そして自らは

決して認める気のない嫉妬――。

さまざまな要因が絡み合ったこともあり、ラエスリールは城長という浮城の最高権力者の後ろ盾があっても尚、この場所から疎外された――当人にも責任はあったが、それはごく一部の人間に係わることで、おおよその事情とはこういうものだった。

そうした中にあって、スラヴィエーラは全く違う理由で、ラエスリールを嫌っていた。

スラヴィエーラがどうにも受け入れがたい――好きになれないと思ったのは。

ラエスリールの日々の言動にあった。

無表情だとか言葉が足りないだとかそういうことではなく。

『卑屈な心根がちらほら垣間見えるところが、どうにも嫌いなんです』

ラエスリールが紅蓮姫に選ばれ、剣術の稽古に出向くようになってしばらく経った頃、当然のことながら孤立してしまった彼女を心配し、セスランが様子を見に来た。

数十年姿が変わらぬ万年青年捕縛師は、何をどう考えたのか――嫉妬もあって、彼女の嫌われ具合は相当なものだったから、口を挟まずにいられなかったのは理解できるが――ラエスリールの嫌われる原因がどこにあるのか、よりにもよってスラヴィエーラに尋ねてきたのだ。

スラヴィエーラは渋面で、一度その問いに答えることを拒んだ。

なぜなら、周囲がラエスリールを嫌う理由と、自分のそれが大きく違うことに気づいていた

からだ。

「わたしに聞いたところで意味はないと思いますよ」

そう説明までしたというのに、セスランはしつこく理由を尋ねた。

あまりにしつこいので、「なんで他のひとの意見を聞かないんですか?」と問い返したところ、飄々とした態度で「参考意見はできるだけ多く集めたいからね」という、答えたくないというこちらの意思などまるで無視した勝手な理由を挙げられた。

最低、と正直思った。

思ったけれど、渋ったところで目の前の青年が諦めてくれそうにないことだけはその崩れない笑顔から窺い知れたものだから、早々に切り上げるためにも、本音で答えた。

それが前述の台詞なのである——。

※

スラヴィエーラはラエスリールが嫌いだ。

魔性の気配を漂わせているからでも、時折こちらがはっと息を呑むような気迫や力を放つからでも、それが不信を誘うからでもない。

紅蓮姫に選ばれたことで、その使い方を学ぶために破妖剣士の訓練に参加するようになった時、彼女は全くの素人だった。

だから、その下手さを嘲る気はなかったし、彼女はあまり筋が良いとは言えなかったが、学ぶ姿勢は真摯だったから、最初は好意的に捉えてさえいた。

ゆっくりと基本を身につけていく姿は、遅々たるものではあったが確実なもので、ああ、このひとは確実にひとつひとつを心と体に刻み込む形をとるのだな、と思った。

決して早くはない——だが、着実に力をつけていくその様子に、ある日素直に感じた思いを伝えた。

剣で戦う素地を全く持たないところから、ここまでくるにはどれほどの努力が要ったことだろう——それを為した彼女は凄い。

本当に、そう思ったからだ。

「凄いね」

本心から告げたその言葉に、ラエスリールは驚いたように顔を上げ——しかし、すぐに目を伏せて答えた。

「全く駄目だ。この程度では」

確かに彼女の当時の実力は、他の破妖剣士に比肩するものではなかったし、上を目指すなら、

こんな状況で満足すべきではない。

そう思ったからスラヴィエーラは「そうか」と答えた。

それからしばらくして、ラエスリールはガンディアへ派遣された。

漆黒の魔性に襲われた古王国を救うために。

正直、その話を聞いたとき、スラヴィエーラは二度と彼女に会うことはないだろうと思ったものだ。

小鬼や妖鬼の上に、妖貴と呼ばれる上級魔性が存在することは彼女も知っていた。

だが、その存在が表に出てくることは稀であり、出て来た場合、完全なる人間の敗北に終わることも知っていた。

ガンディアもそのことは知っていただろう。

だが、それでも諦めきれず、浮城最強の破妖刀の力に縋らずにいられなかった——当の破妖刀が長らく飢餓状態にさらされ、その使い手に護り手の援護も期待できないことまで、かの国が当時把握できていたかどうかまではわからないが。

紅蓮姫に選ばれた不器用な少女は二度と浮城に戻ってくることはないだろう。

それでも断れぬ依頼であり、城長の命があったとなれば、スラヴィエーラは何も言えなかった。

見殺しにすることになるのだとわかっていても、看過するしかない心に広がる苦みを味わいながら、親しくもないが死地に向かう少女を見送った。

だが、ラエスリールは生き抜いた。

漆黒の魔性と対決しながら、生きて勝利して浮城に戻ってきた！

「凄いじゃないか！」

虚心もなにもなく称えたスラヴィエーラに、ラエスリールはしかし、静かにかぶりを振って答えたのだ。

「わたしの力じゃないから」

と――。

妖貴の脅威を退け、生きて戻ってきた少女は、誇るべき自身をまるで認めようとはしなかった。

それどころか、自分の努力もなにもかもを、まるで塵芥のように切り捨てているように見えた。

ふざけるな！

スラヴィエーラはその瞬間、ラエスリールに対する強烈な怒りと嫌悪を覚えた。

妬みではない。そんなものではない。

自身で摑み取った成果を、そうと認めない彼女に対してどうしようもない怒りを覚え、その心のありようの歪さに言いようのない違和感と嫌悪を覚えたのだ。

どれほどの奇跡を自ら成し遂げたのか、正当に自身を理解し評価しようともしない彼女自身に対して。

これほどの成果を示しておきながら、どうして自分をまっとうに評価しようとしないのだ。

自らの成果におごり高ぶるのは論外だが、かつて人間の誰にも為し得なかったことを成し遂げたことを、どうして自らの力と信じることができないのか⁉

お前はこれまで、浮城の誰も成し遂げられなかった偉業を達成したくせに、どうしてその自らを認めようとしないのか⁉

それは、浮城の歴史とそこに生きてきた者全てに対する侮辱だ。

謙遜などという言葉では片付けられない。

お前は——かつてない栄光を手にしながら、自身を貶め続けるお前は。

わたしを含む、これまで浮城で生きてきた全ての人間をも同時に貶めているのだと、なぜ、どうしてわからない⁉

胸に湧いた激烈な怒りは、しかしラエスリールには届かなかった。

それこそが、彼女を決定的に嫌う引き金となった。

ラエスリールが嫌いだ――力を持っているくせに、そのことを微塵も自覚しない彼女の在り方が。

ラエスリールが嫌いだ――完全に癒されながら、それでも消えぬ傷跡を抱えるほどに苦しみ戦い勝ち抜いたくせに、そのことに何ら重きを置こうとしない不遜さが。

自分には何ら価値がないのだと信じ込んで、何を為そうとそこに意味を見出そうとしない――卑屈さが。

大嫌いだ。

大嫌いだ、大嫌いだ、大嫌いだ！

ずっと、そう思ってきた。

けれど、今。

たった今。

わかったことがあった。

元凶はこいつか――！

ラエスリールがずっと、自分を誇れなかった理由――その根源。

誇るに足る成果を上げながら、彼女が頑なまでに自分を評価しなかった原因。

目も眩みそうな金の輝きとともに突然現れた、圧倒的力を放つ、人間と似た姿を纏う、だが

絶対的に違う存在。

ずっと苛立ち、嫌ってきた。

自分が焦がれるほどの力を湛え、望むことさえ叶わなかった奇跡をその身で成し遂げながら、常に自らを卑下し続けることで、到底言葉に尽くせぬ怒りと苛立ちと嫌悪と憎悪をスラヴィエーラの中に生み出した根本。

そうか、お前か。

お前だったのか！

気づいた瞬間、スラヴィエーラは叫んでいた。

迸る叫びは、まさにこれまで胸に抱え込んできた思いそのもの。

全てを彼女は吐き出した！

「っっっざけんなっ！」

自身の為したことを自然に受け入れることはおろか、どんな成果も塵芥にすぎないと——そんな風に心に刻み込んで……そう、刻み込ませ続けて！

「ふざけるな！　ふざけるな！　ふざけるな！」

相手が圧倒的な力を纏う世界の王のひとりであることも、この時の彼女には関係なかった。

一言、怒鳴りつけなければどうにも気が済まない。

何としても、この思いだけは叩きつけてやらなければ！

「父親のくせにっ！」

凍りついたように、微動だにしなかった元同僚が、驚いた顔でこちらを振り向いたのが見えた。

何だよ、とスラヴィエーラは思う。

あんた、全然鉄面皮なんかじゃないじゃないか。その間抜け面を見たら、浮城の誰だって、そんな誤解なんて抱かなかったに違いないのに、タイミング悪いのも含めて、あんたほんとに運が悪いんだ。

続ける言葉が暴言以外の何ものでもことはわかっていた。

それでもスラヴィエーラは叫ばずにいられなかった。

どうしても、これだけは。

この一言だけは、どうしても！

係わった自分が、そのせいでどれほど煩悶したか、悩まされたか、イライラさせられたか、正直殺意に近い憎悪まで抱かされたか。

その全部の元凶に、彼女は怒りとともに本音をぶつけずにいられなかった。

「親のくせにっ！　自分の子供の心をへし折るような真似をするんじゃない！」

迸る思いのままに放たれた言葉が、崩れかけた璃岩城（りがんじょう）を震わせた――。

5

強大すぎるふたりの魔性の皇と王の気配に、今にも砕けそうに震える璃岩城をさらに震わせたのは、強者ふたりによる力や波動ではなかった。

思いもかけぬ怒号に、ラエスリールの意識が反応する。

これは……知っている。

知っている声だ。ここまで怒りに支配された声を聞いたのは初めてだが、この声は確かに何度も聞いたことがある。

体と心と意識とが、ばらばらになった状態であっても、ついそちらを振り向いてしまったのは、その声に宿る感情が純粋すぎるほどに澄み切っていたからかもしれない。

目に映るのは、かつて同僚だった破妖剣士の女性だ。

何度か褒めてくれたことを覚えている。

だが、その度に否定して、いつの間にか嫌われて疎遠となってしまったひとだ。

そのひとが、今、璃岩城を震わせるほどの怒りに満ちた声を上げている。
どうしてだろう……？　何を彼女は怒っているのだろう？
声は聞こえる——だが、まだしっかりと回路が繋がらない状態で、彼女の言葉やその意味がよくわからない。
ただ、その声に宿る熱が、少しだけ胸を灼くのを感じた。
ちり、と熱という熱が失われた胸を、本当に少しだけ。
何だろう、これは何だ？　今、何が起こっている？
わけがわからず、元同僚を凝視したラエスリールは、その指先が自分に向けられたのを知り、また首を傾げた。
「あんたもあんただ、ラエスリール！」
迸るような怒りが、その指先から放たれたように、今度は真っ直ぐに彼女の胸に届いた。
「いくら相手が親だからってっ！　何好き放題言わせてんだいっ!?　凍りついてないで、ちょっとは反論したらどうなんだい!?　どう考えたって、親が子供に向かって言う台詞じゃないことばっかりじゃないか！　いくら親子だってね、言っていいことと悪いことってのはあるんだよ！　あんたがそんな風に黙りこんじまったら、この馬鹿親父はそんなこともわからず、ずっと同じことを繰り返すんだよ！」

馬鹿親父――王蜜の妖主を指すとは到底思えない言葉に、ラエスリールの心は別の意味で凍りついた。

そんな彼女の反応をどう受け止めたのか、スラヴィエーラがさらに怒気を増した声を上げた。

「それともなにかい⁉　親父の言うことはもっともだとか、親父の言うことに間違いはないとか思ってるっていうのかい⁉　それこそ冗談じゃない！　親だって間違うことぐらいある！　あんたがわからないのなら、あたしが言ってやる！　今、あんたの親父があんたに対して取ってる態度は、完全に親として間違ってる！　そいつの子供として、あんたは怒って文句言って非難する権利があるんだ！」

真っ直ぐな感情とともに、スラヴィエーラの言葉が胸に飛び込んでくる。

だが、それはラエスリールにとっては理解不可能な呪文のようなものだった。

だって、父は――物心ついた時から、変わらず父は。

自分にとって特別で、誰より美しく強く、何より自分の世界の半分以上は、彼によって存在していたのだ。

もう半分を占めていた母にも、父は常に優しかったし、ふたりが寄り添う姿は自分にとって最も幸福な時代の象徴なのだ。

そこにリーダイルがいて、自分がいて。

四人だけの世界――そこで、最も強い力を放ち、閉じられた空間を守ってくれていたのは父で……このひとは、特別などという言葉では言い尽くせぬほど、絶対のひとだったのだ。

あの優しい世界が崩壊して十年以上が経つけれど、それでもあれを支え守ってくれていたひとへの思いは変わらない。戻れないし戻る気もない――壊れてしまった箱庭は、決して二度と取り戻せはしない。

わかっている――それでも。

「と……っっ！」

父さまを悪く言わないでくれ！

叫びそうになった口を、ラエスリールは咄嗟に覆った。

なんてことを――。

自分は、口走ろうとしたのか。

純粋に自分のために、怒りの声を上げてくれたスラヴィエーラに向かって、父の態度に臆して凍りついた自分を叱りつけてくれた、恩人である彼女に対して！

父と別れてから手に入れた――自分を包む世界。

そこで育まれた心が、ゆっくりと息を吹き返す。

ああ、と思う。

本当に、自分は何と情けないのか。

家族で暮らした宝石のような時間も、その後の苦しい日々も、迎えられた浮城で注がれた優しい想いも――どれが重要などということはなく、全てが組み合わさって今の自分がいるのだということを、スラヴィエーラに怒鳴られるまで忘れてしまっていた。

父への想いの強さに引きずられ、心を閉ざしたところで何も変わらないというのに、凍りついて立ち止まって、自分を見失っていた。

「うん？　なんだい？　わたしになら反論できるのかい？　なら、我慢しないで言ったらどうだい？　偉大なお父さまを侮辱するな、とでも？　あんたはいつまで十二の子供のつもりでいるんだい⁉」

鋭く厳しい叱責は、鞭のようにラエスリールの胸を打った。

正直、返す言葉がなかった――が。

じわり、と胸の中で小さな熱がまた大きくなった。

叱られて嬉しく感じるのは、相手が自分を気遣ってくれているのが伝わってくるからだ。

さあ、言え。言ってみろ。

そう言わんばかりの元同僚の女性の眼差しを受けながら、ラエスリールは小さくかぶりを振った。

「……いや、礼を言いたくて。ありがとう、スラヴィエーラ。おかげで目が醒めた」
どこまでも真面目にそう伝えると、夢晶結の使い手が意外そうに目を瞠り、次いでふい、と顔を背けた。
その横顔が「わかりゃいいんだ……」と呟くのを見て、ラエスリールは紅蓮姫を摑む右手に力をこめた。
そうだ、自分はいつまでも子供ではない——父を前にしたぐらいで、立ち尽くしていては、この先一歩も進めない。
決めたはずだ——いろいろなことを。
誰かのためではなく、自分のために。
思い出せ——思い出せ！
凍えた心身に檄を飛ばし、彼女は今度こそ前を見据えた。
父と、その背後に立つ少女の姿をした漆黒の皇を——。
その美しい唇が、不快げに歪み、声を紡いだのはその次の刹那だった。
「不愉快な囀りだこと」
耳障りな囀りを、誰が許したというの——？
苛立ちを孕んだその声は、少女の背後に広がる闇を纏いながら、真っ直ぐにスラヴィエーラ

に向かっていく！

駄目だ――！

戦意ですらない苛立ちであっても、今の少女の圧倒的な力を考えれば、触れただけでも人間には耐えられない！

闇を見据え、ラエスリールは叫んだ。

「させない！」

両目が炎のような熱を帯びる――放たれた力は、果たして右の金か、左の深紅か、あるいはその両方か。

真っ直ぐにスラヴィエーラに伸びる闇を跳ね上げる！

方向を変えた闇が、璃岩城の壁を破砕する。

城全体が大きく揺らいだ。

「蜜里！　みんなをっ！」

振り向く余裕はない――女皇を包む空気が変化したからだ。

蜜里の返事も聞こえない。だが、背後で広がる少し前まですぐそばに感じていた力の気配に安堵する。

よかった、と安堵すると同時に、ラエスリールは気を引き締めた。

今の行為で女皇の不興を買ったのは間違いない——だとしたら、次の攻撃は自分に向けられる可能性が高い。

そのとき、父さまは——。

どう動くのか。

恐ろしい。

だが、今感じている恐れは、父に否定されることでも切り捨てられることでもない。もし、父が女皇に真実従っているのであれば、彼が黙って見ているはずがない——その結果、自分にこのふたりを相手取って戦うことができるのか。

何より、自分の背後にいる五人を、その場合どうやって守ればいいのか——満身創痍の三人と仮死状態にあるアーゼンターラを、戦いの場に巻き込むわけにはいかないというのに。

恐ろしいのはその答えが見つからないということだ。

考えろ——ラエスリールは自身を叱咤する。

考えろ——蜜里がいる。漆黒を纏う妖貴の少女が。

勿論、彼女も戦いに引き込むつもりはない。妖主も女皇も、対峙するだけでも耐え難い圧力を受ける相手だ。アーゼンターラのことで大きな衝撃を受けている彼女に、そんな真似はさせられない。

だが、彼女の力があれば、何とか彼らをここから逃すことはできるかもしれない。
いや、何としても逃がさねばならないのだ。
先ほどの女皇の宣言は、世界中の魔性の耳に響き渡った――だが、それを実際に耳にした人間は彼らだけなのだ。
彼らには一刻も早く浮城に戻り、これからに備えてもらわなければならない。
女皇に『人間が生まれぬ新世界』を創造させるつもりはないが、あの宣言が魔性たちの箍を外してしまった可能性は高い。
人間たちが何も知らぬ間に、彼らの爪や牙がその喉元を引き裂くべく動き出すのは止められない。
考えろ、考えろ、考えろ――！
必死に方法を模索するラエスリールの耳に、女皇の冷ややかな声が突き刺さった。
「……なんという、無礼な振る舞いでしょう」
底知れぬ闇の双眸が、ひたりと彼女に向けられている。
「不愉快な囀りを止めようとしたわたしの意を曲げようとは」
許し難いわ。
静かな声音とともに、無温の怒りがその場を支配する。

だが、少女はすぐには動かなかった。

「一の君……止め立ては無用に願いたいわ。あなたの娘御の行いは、看過するには酷すぎる」

王蜜の妖主への断りは、しかし我が意を通す決意を示すだけのものだ。

「娘御への情で、なおもわたしを止めようとするのなら、申し訳ないけれど、あなたはこの場に相応しくない。早々に立ち去ってくださいな」

その言葉を聞きながら、ラエスリールは父が決してこの場を立ち去らないだろうことを確信していた。

女皇が言う『情』など、父はとうに切り捨てているのだから——だから、彼は立ち去らない。そして、そうである以上、背後の五人を逃がすのは至難の業だ。

奇襲をかけるか——その隙に逃げろと蜜里に叫ぶか。

否。

無駄だ、そんな叫びのかけらでも、口から洩れた瞬間、父には確実に見破られてしまう。経験の少ない少女と違い、彼がこの場におけるいかなる事象をも見逃すはずがない。

ではどうする。どうすればいい。

自分たちには無言で通じ合えるような信頼関係はない。阿吽の呼吸はおろか、眼差しで意図を満足に伝えられるかどうかも怪しいものだ。

これがアーゼンターラと蜜里なら、互いを信じ合うことで道を開くことができたのかもしれないが、自分と蜜里では到底無理だ。

だが、その無理を何とかしてなさねばならぬのも事実だ。

そうでなくては、父の目をかいくぐって彼らを脱出させることはできない。

いったい、どうしたら――!?

悩むラエスリールは、その時、父の行動に気づくのが一瞬遅れた。

視界の隅に走る金の光――それが、漆黒の少女の前に跪く父の姿であることを、理解することができなかった。

これまで一度として想像すらしたことのない……できなかった光景ゆえに。

璃岩城の床に膝をつき、女皇を見上げながら黄金の魔王がゆっくりと口を開く。

「いいえ、我が君――今この世におけるわたくしのただひとりの主たる御方」

抑揚のある低い美声が淀みなく言葉を連ねる――至上の楽の音にも似た陶酔感をその場にいる全員にもたらしながら。

「お止めいたします、娘への情などのためではなく、至高の御君のためなればこそ」

少女を見つめる黄金の眼差しに、どんな光が浮かんでいるのか、ラエスリールからは見えなった。

見えずに幸いだったのかもしれない。

父のこんな声を耳にしたのは初めてだったから——その眼差しを目にして、やはり初めてのものだと知れば、いくらわかっていても心に走る痛みに悲鳴を上げずにいられなかったかもしれないのだから。

それは女皇にとって意外な言葉だったのだろう。

怒りに燃える闇の双眸が、怪訝そうに揺れた。

「一の君？」

「お止めいたします、我が女皇。先ほども申し上げました通り、皇は皇たる御身を軽んじるべきではございません」

年長の妖主の言い聞かせるような口調が気にくわなかったのか、少女の眼差しが険を帯びる——。

だが、彼女が何か口にするより早く、父の唇が言葉を放った。

「皇が自ら動かれるのは、それに相応しき相手に限るべきでございましょう。塵芥も同然の出来損ないや不愉快な囀りを放つ小鳥程度に、御身が手を下す必要はございません」

酷い言葉だ——先ほど以上に、ラエスリールを貶め、凍りつかせておかしくない言葉だ——だが、彼女の心を締めつけるのは痛みでも凍気でも渇きでもなかった。

心臓を直に鷲摑みするのは、とてつもない危機感と――その先に待つ恐怖だ。
まさか、とはもう思えない。
振り返れば、父がこの場に現れた瞬間にも、その可能性に気づいてしかるべきだった。気づけなかったのは自分の過去へのこだわりと信じたくないという想い故――。
だが、客観的な事実だけを見るならば、ここで父が口にする言葉はひとつしかない。
そして、父である黄金の魔王は、彼女の想像したとおりのことを、淡々と……耳にする者を魅了せずにおかぬ声と口調で。
静かに――どこまでも静かに告げた。
「御身を不愉快にさせるモノ、御身に無礼を働くモノの始末など、一言配下に命じられればよろしいのです」
何のために、ここにわたしがいるとお思いですか？
最後の一言にこめられた響きだけが、それまでのどんな言葉に宿るそれよりも穏やか且つ誠意を纏って。
璃岩城全体に染み渡った。
「お命じください、我が女皇」
何を、とは――最早言うまでもないのだろう。

そして女皇も、その願いを聞き入れる。
こちらも、子細（しさい）は口にしない。
ただ、一言。
「許す」
と応じた――。

6

肉親の情というものを、妖貴たる蜜里は理解することができない。
生まれて間もなくアーゼンターラと出会い、彼女が年子の弟や家族に囲まれている姿は常に見ていたけれど、自分にとって特別だったのはアーゼンターラひとりだった。
勿論、アーゼンターラが家族のことを——不満を口にしながらも——大切に思っていたことは知っていたから、何かあったら彼女のついでぐらいには助けてやろうとは思っていたが、結局そうすることで大事な少女が悲しんだり苦しんだりするのがイヤだからという理由に過ぎなかった。
村が灼け落ちたあの夜を境に、アーゼンターラが自らの記憶を塗り替えた時、蜜里は人間の思いとはかくも凄まじいものかと痛感した。
記憶は自らのこれまで生きて来た道筋そのものだ。
そのなかで得た経験全てが積み重なって、現在の自己を形成する要とも呼べるものだ。

アーゼンターラはその要を、悔恨ゆえに自ら手放し、実体のないモノに塗り替えた。人間の間ではそれは心の弱さだと言われていることを後に知ったが、蜜里には到底そうとは思えなかった。

自分のこれまでを捨てるなど、彼女には想像もつかないことだったからだ。

自身の要たる記憶を改変するなど、自身をも歪める行為に外ならない。そんな行為は、蜜里にはとてもできないし、やろうとも思えない。

それを、アーゼンターラは為した。

人間たちが言う通り、それが彼女の弱さ故の行為であったとしても、それを起こした想いの凄まじさを思う時、蜜里は驚嘆を禁じ得ない。

家族を——自分のせいで失ったという衝撃が、アーゼンターラをそうさせたのだ。

家族とは、かくも凄まじい行為を引き出す理由になるものなのか。

なるのだろう、と今では少しだけ理解できるような気がする。記憶を取り戻したアーゼンターラが、あの夜唯一生き残った弟のために、死地としか思えないこの場所を必死に目指した姿を目の当たりにしたのだから。

だから、人間にとって家族というものは、自分たち魔性が考えるよりずっと大きく重い意味を持つのだろうと、今では認識している。

けれど――。

それが、自分を凌ぐ力と輝きに溢れた眷属――と呼ぶには、違いすぎる存在ではあるのだが――についても、同じことが当てはまるのだとは思いもしなかった。

ラエスリール――王蜜の妖主の娘にして、破妖刀紅蓮姫の以前の使い手。

アーゼンタールの命を目前で奪われ、呆然自失していた自分の意識をこの現実に引き戻してくれたひと。

輝かしいまでの光を纏い、全魔性の上に君臨する女皇を前にしても、怯む様子さえ見せなかった女性が、新たに現れた王蜜の妖主を前にした瞬間、瞬時にその輝かしさを失い、凍りついていくさまを目にした時、蜜里は信じられなかった。

これでは、アーゼンタールを取り戻すことができない――最初に思ったのはそのことで、心に灯った小さな火が消えそうになるのを感じた。

だが、なぜかラエスリール自身に対して失望することはなかった。

勝手に現れて、勝手に期待させておいて――と、彼女を責める思いが欠片も浮かばなかったのは……。

聞いてしまったからだ。

ラエスリールの悲痛な声が、王蜜の妖主を「父さま！」と呼ぶのを。

そして、その妖主の瞳に、我が子へ向ける情の欠片も浮かんではいないことが見て取れてしまったからだ。

人間が、家族に対して抱く——自分たち魔性にとっては——考えられぬまでの執着とこだわりが、その心に何を及ぼすのか、蜜里はアーゼンターラのそばでずっと見てきた。

アーゼンターラは慟哭のあまり、自身の要とも呼ぶべき記憶を一度壊し、作り変えた。それはこれまで積み上げてきた自分自身をそうするのと同じ行為だ。少なくとも魔性である蜜里にとってはそれ以外の何物でもない。

気配は完全な魔性であるにもかかわらず、ラエスリールからは愛する少女と同質の気配が放たれている。

魔性でありながら、この魂はアーゼンターラに……人間に近い。

否、もしかすると彼女以上に、ラエスリールの魂は凄まじさという点においては人間の粋に至るかもしれない、と思った。

愛する少女と同じこだわりを持つが故に、心まで瞬時に凍りつかせてしまう彼女を——蜜里は、魔性としては異端の感覚だったかもしれないが、仕方ないと受け入れたのだ。

アーゼンターラと出会わず、彼女と深く心を交わしていなければ、なんと脆弱なと罵り誹っていたかもしれない。あるいは弱さをさらけ出した相手を嘲笑していたかも。

だが、アーゼンターラを最愛の者と定める蜜里にとって、父親を前にして、凍りついたラエスリールは否定できる存在ではなかった。

これほどに、縛られて――これほどまでに呪縛されて。

かつてのアーゼンターラと重なり過ぎるその姿を、蜜里はただ受け止め認めるしかできなかった。

同時に、心に絶望が広がる。

駄目だ……ああ、これでは、無理だ、と。

こんなに凍りついてしまった魂が、再び動き出すことはかなわない――アーゼンターラの命を取り戻すことはできない、と。

諦めが、蜜里の心を再び奈落の闇へと引きずりこんでいく。

アーゼンターラは取り戻せない。皇たる少女の宣言は間違いなく実行される。だとしたら、自分は彼女の生まれ変わりにさえ出会うことはない。

永遠の喪失――今度こそ、絶対の、決して覆されることのない……。

ならば、自分がここに存在し続ける意味はどこにあるのだろう。

人間の命は短い。わかっていても、アーゼンターラを選んだ。彼女の短い生を、それでも最後まで見届けたい、と心から思った。彼女の死後のことはうまく想像できなかったけれど、き

っと彼女の子供や孫が生まれたら、同じほどには無理でも、多少の好意は抱けるだろうから、それを見守ってやるのもいいかと思っていた。

そうしているうちに、またアーゼンターラと同じくらい好きになれる人間が生まれてくるかもしれない。もっと待っていたら、彼女の魂が再び人間として生まれ変わってくるかもしれない——そうしたら、今度は自分のほうが生まれてすぐにその魂のもとへ駆けつけるのだ。

そうして、ずっと一緒にいる。

アーゼンターラの傍で、時々玩ぶように想像していた未来。

けれど、それは決して現実にはならない。

アーゼンターラの命は女皇の手に落ちた。輪廻に還ることはかなわない。何より女皇が新たな世界に人間の存在を許さない。

自分の傍に愛する少女が戻ってくることはない。彼女の子供も孫もいない。弟はいるけれど、彼女の穴を埋められるような存在ではない。

だとしたら——本当に、自分がここに存在する意味は？

蜜里は知らず、自壊への道を辿っていた。

人間と違い、意志こそが存在の唯一の拠り所である妖貴にとって、自身の存在への疑問は死へ到る毒となる。

幼い彼女はそれと知らず、自らを崩壊させる道筋を辿ろうとしていた。
だが――彼女がその道へと決定的な一歩を踏み出す直前。
鋭い声が、彼女を呼んだ。
アーゼンターラのものではない、だが同じほどにあり得ないと思える声が。
王蜜の妖主を前にし、完全に萎縮し、凍りついてしまった魂の主のそれが。
完全に息を吹き返し、先ほどと同じほどの力を纏い、これまで聞いたことがないほどの切実な響きを帯びて。
「蜜里っ！」
彼女を、呼んだ。
ただの一言――けれど、声にならぬラエスリールの思いが胸を貫く。
どうか、皆を――！
その必死な訴えが、あまりにアーゼンターラのものにそっくりだったために、我に返った蜜里は即座に反応した。
打ち砕かれた璃岩城の壁――大きく揺らぐ城の広間で、今にも命を潰されそうになっているのは。
スラヴィエーラ、オルグァン、マイダード――！

愛する少女が姉とも兄とも慕った三人。
死なせない！
彼らが死んだら、アーゼンターラが悲しむ。アーゼンターラが苦しむ。
それがわかるから、それだけはさせない！
思いを胸に、蜜里は三人と仮死状態にある少女の体を瞬時に包みこみ、破壊の力から隔離した。
心に強烈な負荷がかかった。
理由など言われずともわかった。
自分が彼らを守るために揮った力が、女皇の意に反するものだったからだ。
自分は、全魔性の頂点に位置する絶対の皇の意に逆らったのだ。
そうと自覚した瞬間、蜜里はそれでも自分が存在していることに驚きを覚えた。皇たる存在に逆らうモノが、無事に済むはずがない。
スラヴィエーラたちを守るために力を放った瞬間にでも——否、そうすべく反射的な決定が為された刹那にも、千々に引き裂かれるなり全ての命を霧消されていてもおかしくはなかった。皇にはそれだけの力がある。
なのに、なぜ——？

浮かんだ疑問について考える時間があれば、蜜里は必死に答えを求めたことだろう。
だが、残念ながら、彼女にはそんな余裕は与えられなかった。
場を圧するふたつの強大な存在のひとつが、その力を放ったのだ！
璃岩城を――紫紺の闇が支配する空間を、黄金の輝きを放つ闇が圧倒する。
主を失い、最早玻璃より脆くなった城が悲鳴を上げる。
押し潰される――攻撃されたわけでもないというのに、放たれただけの力に、蜜里は自分が作り上げた結界が軋みを上げるのを聞いた。
何が起こっているのかわからない。
結界に囲った皆を守るだけで精一杯だ。
世界の王たる者の力の一端に過ぎぬ力から、我が身とアーゼンターラたちを守ることだけで――。
けれど、なぜか絶望はなかった。
圧倒的な黄金の力が吹き荒れるこの空間で――自分さえ、膝をついて堪えるのが限界だというここで。
蜜里の瞳は、前に立つ女性の背中を捉えていたから。
凍え切り、渇き切り、今にも壊れそうだった心をいかにしてか立て直し、より強い輝きを放

つようになった——ラエスリールの背中を。
絶対の印象はない。
揺らぐことなき強さは感じられない。
けれど、揺らぐ者が無力でないことを、今の蜜里は知っている。
壊れかけてはその都度立て直し、あるいは一度壊れたとしても、それを自ら再生する——柔らかく脆いからこそ、為せる再生の術。
魔性にはない、人間の心だけが為せること。
アーゼンターラが蜜里に見せてくれた。
そして今、ラエスリールも見せてくれている。
きっと、自分が見ようとしなかっただけで、スラヴィエーラやオルグァンやマイダードもそうやって何度も自分を立て直し、生まれ変わらせてきたのだ。
好きだわ。
不意に、心に浮かんだ一言は、これまでアーゼンターラひとりだけに向けられてきた想いだった。
人間としての弱さも強さも、これまでは全てアーゼンターラだからという理由で受け入れ、感心してきた。

けれど、今――心に湧き上がってきたこの想いは。
わたし、人間が好きだわ。
皇は次の世界には人間は生まれないと言ったけれど。
それは、イヤだわ。
ぽつりと。
雨の一滴が水面に落ちて生じさせたかのような――小さな、ごく小さな波紋にも似たその想いが、どこから生じたのか、蜜里が考えるより先に、彼女を呼ぶ必死な声がその意識を震わせた。
「蜜里っ！　頼む！」
アーゼンターラでない声が、けれど同じぐらいの強さで蜜里を揺さぶる。
それは、恐らく同じ思いと強さを持つからこそ――。
「皆を浮城に連れ帰ってくれ！」
声の主に目をやれば、真紅の破妖刀を手にした女性が、渦巻く黄金の闇にその身を呑み込まれようとしているところだった。
圧倒的な力の渦――巻き込まれれば、ただではすまない。あんなものに呑み込まれたら、無事に済むはずがない！

それどころか、彼女があの闇に呑み込まれれば、今度は自分たちにあの力が押し寄せてくるのは間違いない。

彼女の言葉に従うべきだ。

蜜里は瞬時に理解した。

だが、たったひとつの理由が、彼女に動くことを躊躇わせていた。

だって、だって、だって――！

ターラの命は体から抜き取られたままなのに！

今抱いている少女の体は脱け殻だ。命は自分の張った結界の外にある。

その命をここに置いて？

この場を立ち去ったが最後、二度と見いだせないかもしれないのに？　否、その可能性のほうが大きいとわかりきっているのに？

そんなことが、できるはずが――。

ない、と蜜里が決意する寸前、ラエスリールの叫びが再び耳を打った。

「蜜里！　わたしを信じられないのなら、アーゼンターラを信じろ！　アーゼンターラの心を、願いを信じろっ！　アーゼンターラが帰りたがるのは、お前たちのもとだろうっ⁉」

ならば、彼女の帰る場所を守れ――！

四つの心臓――そこに宿る全ての命が、その声、その言葉に従うことを瞬時に選んだ。
押し潰されそうな力の吹き荒れる嵐の中――蜜里は必死に力を紡ぎ、璃岩城からの脱出を計った。
その決断の意味を悟ったのはしばらくしてからのことだった。
蜜里は、女皇ではなくアーゼンターラ――人間を選んだのだ。
そして、それを悔いることはなかった。

第三十六章　落日

1

璃岩城の奥で上げられた魔性の皇たる少女の声は、世界中の魔性に届き、その心に鮮烈に焼きついた。

『急ぎなさい、人間で遊びたいのなら――わたしが築く新たな世界に、人間が生まれることはないのだから！』

その言葉の意味を、取り違えようはずがない。

新たな世界に人間は生まれない――ならば、人間で遊ぶなら今しか……女皇が新たな世界の創造に取りかかるまでの僅かな時間しかない。

いつ、彼の皇が着手するかもしれない。

明日かもしれない――いや、今まさにそうしているかもしれないのだ。

そうであれば、暇つぶしにかまけている場合ではない。

無限に近い命を持つ者として、あまりにも短い有限の時に縛られた人間の一生ぐらい、つき

あってやるのも面白いと思っていたのは、皇の言葉を聞くまでだ。
今は、違う。
一刻の時も惜しい。
人間という存在が、世界から消えてなくなるのであれば、それまでに遊び尽くしてしまわなければ勿体ない。
そう思う者は少なくはなかった。
人間は消える。
人間という玩具は、もう少ししたら永遠に失われてしまうのだ。
ならば――。
これまで、人間にさしたる関心のなかった者の心には、消えるのならその前に一度ぐらいは遊んでみようか、という思いが。
それなりに人間に好意的ではあっても、眷属と敵対してまで守ろうなどと思わない者の心には、同族間の戦いを避けるためにも人間への守護を取り下げようか、という思いが。
仕掛けた遊戯の機が熟すまで、じっと待ち続けていた者の心には、最早待っている余裕はないという焦りが。
人間を喰らいたい、その悲鳴を酔うほどに聞きたいと思う者の心には、これまで歯止めとな

っていた忌まわしい浮城をもう気にする必要はないのだという解放感と歓喜の念が。
膨れあがる。
歯止めはすでに利かない。
浮城の住人も含め、人間という種は終わりを告げられた玩具だ。
ならば、もう何も気にする必要はない。
好きなだけ牙を剝き、研いだ爪を柔肌に埋め、引き裂き、飛び散る真紅を思う存分味わっていけない理由はない。
女皇の宣言が世界に響き渡った後——。
世界は——人間の耳では捉えられぬ、魔性の声に覆われた。
そのほとんどを占める歓喜の声を上げる者は。
浮城の内部でも、皆無ではなかった……。

※

それは夜半のことだった。
アーゼンターラたちをマグァーラ帝国第三の都市カーヴィアへ派遣して以来、城長であるア

ーヴィヌスは満足に眠れぬ日々を送っている。
世界最大版図を誇るマグァーラ帝国皇帝から直々の依頼は、形はどうあれ絶対の命令であったし、そこに差し向けざるを得なかった四人の無事を、外に出すことはなくとも彼は常に願っていた。
だが、彼らにだけ意識を向けるには、浮城の長たる彼にかかる責任は大きすぎた。
日に日に増える魔性被害――依頼の数だけで、浮城の全住人の倍を大きく超えるという、十年前からは想像もできない非常事態が続いている。
魔性の被害に苦しむ同胞を救うために、尽力すべき組織の長でありながら、ここ数年自分が為していることといえば、その同胞たちの受ける被害を斟酌し、救いの手を伸ばす優先順位をつけることだ。
被害の多寡を理由に、浮城が人員の派遣を決定したことなど、自分以前の城長の代にはなかったことだ。
そうでなければ、今ここに自分はいない。
辺境の田舎町で起こった事件にさえ、浮城が力を割き、有能な人材を派遣してくれたからこそ、妖鬼に命を狙われた自分は助かり、その才を伸ばす機会を与えられた。
そのことへの感謝の念を忘れたことはなく、だからこそひとりでも多くの人間を魔性の手か

ら守るためにできることは余さず為そうと心に決めてやってきた。
だがその決意も誓いも理想も——この数年裏切ってばかりだ。
これまでにない、何かが起こっているのは確かだ。だが、それが何であるのか、手を尽くしても手がかりひとつ見つからない。
このままでは、早晩浮城の力も尽きる。
魔性と対峙できる人員の数は限られており、その全員が毎回無傷で帰ってくるわけでもない。中には二度と戦いに赴くことのできぬ体となって帰還する者もいる。
戦える人間は減っていく一方だというのに、被害は増大する一方だ——何としても原因を突き止め、早急に対処しなければならない。
それははっきりしているというのに——。
だん、と執務机にこぶしを叩きつけ、アーヴィヌスは唸った。
「……いったい、何が起こってるんだ！」
それさえわかれば、対処法のひとつも見つかるかもしれない。
それすらわからないから、何一つ有効な策を講じられない。
深いジレンマに、彼のこぶしが再び振り上げられた時のことだ。
扉が開き、そこから笑いを含んだ声が飛び込んできた。

「知りたい？」
女性の声だった。
なじみ深いとは言い難い、だが知らぬ声ではない。
「藤季か、どうした？」
記憶から拾い上げた浮城の守護につく護り手の名を口にしたアーヴィヌスは、一瞬刺すような敵意を扉の向こうから感じ取り、眉宇をひそめた。
護り手の中には、時折浮城の住人の力量を試すような真似をする者もいる。彼らは自分が従った相手にその価値があるかどうかを確かめずにおれぬのだ。
不意を突くこともあれば、敵意を装った気配を向けることで、こちらの注意を喚起することもある。
だが、それは大概一線で働く住人に仕掛けられるものだ。
アーヴィヌスに向けられるのはどうにも不自然だ。しかも……。
装ったモノではない。
かつては捕縛師として数多の魔性と相対したアーヴィヌスだ。本物の敵意や害意とそうでないものとを見誤ることはない。
どくり、と心臓が大きく脈打つ。

不吉な予感が、胸に広がっていく。
そして、すぐに彼はそれが杞憂ではないことを確信することとなる。
きぃ、と小さな軋みを上げながら、執務室の扉が開かれた。
「ねえ、アーヴィヌス。知りたい？」
入って来たのは、果たして浮城の警護に当たる護り手である女性だった。
灰銀の羽毛に覆われた頭部には、ところどころ黒っぽい染みがついている。猛禽の足を思わせる、鋭い鉤爪を伸ばした指先も同じく、黒っぽく——濡れていた。
彼女が入ってくると同時に、扉の向こうから鉄の臭いが漂ってくる。
アーヴィヌスは彼女を見つめる瞳を険しくした。
「藤季、何の真似だ」
藤季は——人間の血に濡れた護り手は、うっすらと微笑んだ。
「可哀相なアーヴィヌス。あなたはまだ、世界で何が起こっているのか知らないのね。至上の皇がお立ちになったことも、彼の皇が宣じた未来も——」
哀れむように見つめる彼女の双眸には、残酷な愉悦の色が浮かんでいる。
その気配は、獲物を嬲ることを楽しむ猫科の肉食獣を思わせるもので、アーヴィヌスは反射的に懐に手を伸ばした。

そこにある、自身の封魔具を取り出すために——だが。
その瞬間、思い出す——そこに封魔具がないことを。
捕縛師として第一線で働いていた頃なら、浮城に在っても決して肌身から離さなかった自分の封魔具——虹貝。
巻き貝を象った自分だけの武器は、浮城から出ることがなくなって以来、新たに作ることも身につけることもなくなった……浮城の内部で、それが必要とされる事態など生じるはずがないゆえに。
それを忘れて、思わず懐に手を伸ばした——それは、藤季の敵意が紛れもなく本物だという証明に外ならない。
そんな彼の心を読み取ったのか、藤季がにんまりと笑った。
「可哀相なアーヴィヌス。あの麗しき方の声を拾うことができなかっただなんて……あの方が定めた運命を、未だに知ることができないだなんて」
歌うように言葉を綴り、ひたり、と藤季が一歩踏み出す。
血臭が、強くなる。
アーヴィヌスは必死に思いを巡らせた。
今、この浮城で何が起こっているのか——。自分は正確に把握する義務がある。そしてそれ

を浮城の住人全員に知らしめる責任が。

人間の血を纏い、敵意と害意を顕わに迫ってくる藤季――果たして、これは彼女単独の行動なのか。それとも共犯者がいるのか。いるとすれば、それはいかほどか。

どうしても、それは把握すべきことだった。

そのために、彼は藤季の言葉に含まれる謎をまず解くべきだと思った。

皇――音としては「おう」……魔性の王と呼ばれる妖主のことかと思ったが、声に宿る響きが違う。

五人いるという魔性の王――妖主。

だが、藤季が口にした「皇」とは唯一絶対のものに聞こえた。

確かめなければ――それは、務めであり譲れぬ決意だった。

「……皇とは何だ。何を知り、藤季、お前は自らの務めを放棄した」

護り手としての誓いを立てた魔性は、決して人間を傷つけないという枷を嵌められる。

だが、藤季は明らかにその誓いを犯している。

考えられるのは、彼女がいつでも外せるように仕掛けを施した上で誓いを立てていたということだ。強力な魔性ならば可能なことだ。

言霊の支配を人間以上に受ける魔性は、しかし抜け道を用意することに長けてもいる。

自ら条件をつけることで、そこから外れた事例に関しては言霊の呪縛を受けずにすむよう取り計らうことができるのだ――と、以前教えてくれたのは誰だったか。

だが、それだとて完全に無傷で済む抜け道ではなく、多大の犠牲を払ってでもという決意なくしては生じ得ない事態だ、ともそのひとは補足していた。

だからこそ、そう決意し、実行に移した護り手は危険なのだ、と。

『そうなった時の護り手は、手負いの獣と同じよ。自らを切り裂く覚悟で誓いを圧し破る――それだけの覚悟を決めた相手とは、残念ながら話し合いは成立しないと認識しなさい』

自分が死ぬか、相手を殺すか――その覚悟なしに前に立てば、瞬時に命を摘み取られるだけよ。

その言葉を聞いた時、自分は内心「なにを大袈裟な」と思った。

そんな事態が起こったことなどかつて一度としてないことを、アーヴィヌスは他の先達から聞いていた。

あくまで、それは可能性の話だと。

強大な魔性は護り手に降ったように見せかけ、このような仕掛けを隠し持っているかもしれないという――可能性を追求、研究した浮城の頭脳集団が提唱しただけの、『机上の空論』に過ぎないと、その時の彼は判断した。

とくとくと言い聞かせるひとの声音がこの上なく真剣であったことさえ、自分を怖がらせるのが得意な相手のいつもの演出だと思った。

あまりにも、そのひとのことを怖がりすぎていたから、そのひとの告げる言葉、声のどれが真実でどれが冗談かも見極めることができなかった。

できないままに、そのひとは浮城から姿を消して、思い悩む必要がなくなったから、それきり過去の解けなかった問いまで一緒に放り出した。

二度とそのひとから解を得られぬことと、自ら解を求めることは別のことであったのに。

求めても得られぬ解を諦めた。

これが、そのツケか――。

じわじわと押し寄せてくる殺意を肌に感じながら、アーヴィヌスは唇を噛みしめた。

出会った瞬間、恐れを覚えた。

ずっと、その恐怖から抜け出せなかった。

そのひとは、人間の姿をした強大な魔性だった――少なくともアーヴィヌスにとって、それが同じ人間だとは思えなかった。

だから恐れ、嫌悪さえ抱き、自分は違う立ち位置で魔性と対峙するのだと思った。

だから、そのひとの告げる言葉も警告も、人外の存在からのモノとして、受け入れようとは

思わなかった。

受け入れるには、そのひとの捉える世界は未知にして恐ろしすぎるものだったからだ。到底理解することはできず、欠片でも理解しようものなら、心が押し潰されそうな重すぎる真実が潜んでいたからだ。

人間の心が受け入れるには、過酷すぎる現実の一面。

見たくない、見ようとも思わない——そんな世界の一面を、あのひと……彼女はいつも鮮やかに見せつけた。

過酷すぎる未来をしか示唆されないことに、拒絶することしかできなかった。

そんなはずがあるかと。

そんな惨いばかりの未来を、創造主たるガンダルが人間に用意するはずなどないと。

あり得ないと。

だが、そのひとの予言にも似た言葉は、今現実になりつつある。

藤季が近づいて来る——人間の血に濡らした鋭い爪を、自分の喉元を切り裂かんと振り上げながら。

あのひとが言いかけた言葉は、耳を塞ぎ聞きたくないと告げることで遮ることができた。

だが、自ら問いかけたことに対する藤季の答えを、防ぐことはできない。

「皇は、皇よ。この世界に生まれた最後の妖主にして、全てに君臨する絶対の主。彼の皇が宣じられた……新世界創世のための鍵はすでに手にしたと。さらにその世界に人間は生まれないと……！」

人間は不要と皇は見なされたの。

嬉しげに——心底嬉しげな笑みに唇を歪めながら、藤季の長く伸びた鉤爪がぬるりと輝きを放つ。

「だから、もう我慢はしないことにしたの。ここに来てからずっと、いろいろなことを想像しては遊んできたわ。捕縛師に魅縛師に破妖剣士……みんなとても興味深くて、知れば知るほど面白くて好ましく思えて……でも」

同時に思わずにはいられなかった、と藤季は続けた。

「戦うのは、どんなに楽しいかしら、と。でも、ずっとずっと我慢していたわ。せっかく誓いを立ててまで内側に入り込んだんですもの。戦うなら、最高の相手を選ばなければ意味がないわ。一度きりの遊びですもの……本当に、いくらでも待つつもりだったのよ」

でも——。

「急ぎなさいと、皇が仰るのですもの。次の世には人間は生まれないと仰せなのだもの。ならば我慢するだけ無駄というものでしょう？」

告げられる衝撃的な事実に、アーヴィヌスは文字通り凍りついた。
藤季の言葉を完全に理解したわけではない。
謎は多く、問いただしたいことは山ほどあった。
それでも――藤季の言葉に宿る圧倒的力……真実に裏付けられた彼女の言の葉に宿る絶対の力が、彼の心を押し潰すのだ。
皇とは何だ。
次の世とは何だ。
人間が生まれぬとはどういうことか。
「藤季、お前……」
凍りついたように痺れて動かぬ舌先に、必死に力をこめて、アーヴィヌスは問いかけようとした。
だが――。
耳にした言の葉の欠片が、彼の全身を呪縛する。
浮かんだ問いの悉くが、導き出したくもない不吉な未来への証と化してしまったがごとく。
彼の心を縛り上げた。
「本当に、可哀相なアーヴィヌス」

そんな彼のすぐ近くにまで来ていた藤季が、優しい優しい声で告げた。
「あなたにもっと才気があれば、ここに到る前に真実に気づくこともできたかもしれないのに……本当に、可哀相ね」
くすくすと笑いながら、藤季が血に濡れた腕を振り上げる。
彼女の攻撃を躱す術はない。
衝撃に捕らわれている間に、彼女の力にアーヴィヌスの全身は自由を奪われていた。
動けない——逃げられない。
「さよなら」
憐憫も顕わな彼女の声を聞きながら、アーヴィヌスは自身の死を確信し、だが同時に何が何でも彼女が洩らした真実を他者に伝えなければ、と思った。
文字で記す時間はない。
では声に発して伝えるか——だが、いるのか、この近くに、自分の声を耳にし、理解し得る者が⁉
藤季にこびりつくどす黒い染みは……血の量は、到底ひとりやふたりの人間のものとは思えぬというのに！
だが、諦められない——諦めるわけにはいかない。

これだけは、自分が知ったこの事実だけは、何としても残された者たちに伝えなければならない！

誰がいる⁉

いったい、誰が⁉

この事態で混乱を来してしまっているであろう、浮城の住人たちの心を束ね上げるなど、マンスラムでも恐らく無理だ。

恐慌状態にある人間の心を無理矢理ねじ伏せ、強引にでもひとつの方向に向かわせることなど……！

そんなことができる人間がいるとすれば、それはすでにアーヴィヌスの認識では人間とは呼べない存在を指す。

どくり、と恐怖ゆえでなく衝撃ゆえでもなく、大きく心臓が鳴った。

知っている。

自分は、そういう存在を知っている。

人間とは思えぬ輝き、力を纏い、眷属であるはずなのに脅威と恐怖を抱かずにおれなかった……それほどに恐ろしい、存在を。

とうに死んだはずの存在。

だが、いかなる運命の悪戯によってか、今も存在している化け物。
彼女なら――。
かつて浮城の長たる立場にあり、さらに護り手の三分の一を支配下に置く彼女であれば、この混乱をも治めることができるかもしれない。
虫がいいのは百も承知だ。
嫌い続け、恐れ続け、避け続けてきたというのに、都合の良いときだけ助けを請うなど、自分が彼女であっても鼻で笑って終いにするところだろう。
だが、それでも――。
今、救いを求められる存在は彼女しかいないのだ。
どれほど自身の身勝手さを後に詰られようと、嘲られようと――今この時、浮城を見舞っている危険から、ここに住まう者たちを救うことができる人間は！
体の自由はすでに完全に奪われてしまった。
声に出して名を呼ぶことはできない。
藤季の爪がこの喉を切り裂くまでの、残された僅かな時間、魂そのものを声として、力として張り上げるしか――。
チェリク――！

意識魂肉体をも含む、自らの全存在を魔除けとされる鳴弦の響きに変えて――。
アーヴィヌスは求めた、ただひとりのひとを。
いま、この状況を打破し得る、可能性を持つ唯一の存在を。
そして――。
その呼びかけに、相手は応えた。
アーヴィヌス自身、思いもかけぬ言葉でもって、そのひとは――その存在は、彼の望みに応えたのである。

※

「……虎の威を借る狐の分際で、ひとの可愛い弟分を、許しもなくいたぶるのはやめてちょうだいな」
その子を苛めていいのはわたしだけなのに。
忘れようにも忘れられない、恐怖を覚えずにいられぬ鮮やかな女性の声が、聞くだけで泣きたくなる台詞を紡ぐ。
今にも藤季の爪に喉を裂かれそうになっていたアーヴィヌスの目の前に、突然出現した漆黒

の髪と鮮やかな緑柱石（りょくちゅうせき）の双眸を持つ絶世の美女は、そんな一言で彼の中に生まれかけた感動やら感謝というものを一瞬で吹き飛ばしてくれたのだった――。

2

藤季の長く伸びた爪が、今にもアーヴィヌスの喉ぶえを掻ききろうとした瞬間、響いた声は圧倒的力に満ちた――だが、内容といえばあまりにあまりなものだった。

助かった――という思いより、その言葉により打ちのめされたと思ったアーヴィヌスに同調する者は多いに違いない。

現に、実際に藤季の爪を受け止めた――素手にもかかわらず、傷一つ追っていないあたり、感嘆するより嫌気がさしたが――漆黒の青年は、同情するような眼差しをアーヴィヌスに向けていた。

世界に五十人ほどしかいない上級魔性――妖貴に、出会い頭に同情の目を向けられるというのは、アーヴィヌスにさらなる精神的打撃をもたらした。

こちらの無知を哀れむ藤季の眼差しより、ずっと大きな痛手だった。

いったいなぜ、こんなことに。

アーヴィヌスは思わずにいられない。

だが、それは九死に一生を得たからこその……極限の緊張状態から解放された直後だからこそ抱き得た暢気な感想だった。

そうと自覚したのは、びりびりと空気を震わせながら、藤季が放った声が耳に届いた瞬間だった。

「退いてください」

突然現れたチェリクと妖貴の姿に、何も思わず何も感じなかったはずはない。

だが、それに怯む様子もなく、藤季はふたりを前にして、堂々と――退けと言いのけた。

揺らぐことなき自信を覗かせ、妖鬼の身でそう振る舞う――振る舞える彼女の背後に、いったいどれほどのことがあるのかと、アーヴィヌスは寒気を覚えた。

だが、そう感じたのは彼のみであったらしい。

妖貴たる青年を前にしても怯む様子ひとつなく、傲然と言葉を発した妖鬼の態度に、昔なじみの化け物師匠はふん、と鼻を鳴らし、その同行者らしい妖貴の青年はそれに倣うように完全なる無視を貫いたからだ。

「退いてくださいと言ってるんです！　それはわたしの獲物です！　徴をつけたわけでもないのに、横取りなさらないでください！」

苛立たしげに、藤季が言葉を重ねる。
答えたのはチェリクだ。
「どうして、わたしが退かなければならないの？」
心底不思議そうに問いかける様子は、彼女のことを何も知らない者であれば、いっそ無邪気なものだと感じたかもしれないものだった。
だが――彼女を多少なりとも知るアーヴィヌスにとって、それは無邪気どころのものではなかった。
認識を改める。
先ほどの藤季の態度を、獲物を嬲ることを楽しむ猫科の猛獣のようだと思ったのは、大きな……大きすぎる間違いだったのだと。
あんなものは、子猫が虫を前足で遊んで、結果的に死なせる程度の行為にすぎない、と。
そう、藤季は大型の肉食獣などではない。
少なくとも、アーヴィヌスが知る本物のそれに比べれば――否、比べるべくもない小さすぎるものでしかないのだと。
チェリクに救われた身でありながら、ほんの先ほど自分の命を脅かした相手に対して抱く感情としてはどうだろうとは思いつつも、それでも彼はチェリクが現れた時点で撤退を決断でき

なかった藤季に対して、同情すら覚えていた。

「ねえ、どうして？」

問いを重ねたチェリクに、藤季は苛立ちを隠しきれない様子で答えた。

「わたしが！　その男を血祭りに上げて楽しみたいからよ！」

なぜそんなこともわからないのかと言いたげに、藤季がチェリクを睨みつける。

「皇のお言葉を聞いたでしょう⁉　人間で遊ぶなら急がなければならないんです！　常時ならともかく、この状況でわたしが上位の方々だからといって、獲物を譲らなければならない道理はありません！」

だから、退いて――。

感情的な妖鬼の台詞に、アーヴィヌスは違和感を覚えた。

漆黒を纏う青年がこの場にいる以上、妖鬼に過ぎぬ藤季が敬語を用いるのはわかる――だが、彼女が見つめているのは青年ではなくチェリクだ。

その言葉を向けているのも、青年ではない。

まさか、藤季は……思いついた可能性に、アーヴィヌスは思わず目を瞠った。

いや、まさか――いくら何でも、さすがにそれはないだろう。

そう思ったのは、どうやら彼だけではなかったらしい。

チェリクが、何とも複雑な顔をして、連れの青年を振り返って問いかけた。
「……ねえ。あなたたちと一緒にいる間に、あなたたちの妖気が染みついてしまった、なんてことはないでしょうね」
「あらぬ誤解を招きかねぬ御発言はお控えください。事実無根の濡れ衣で、我が君の不興を買うなど御免蒙ります」
気配を険しいものに変えて、答える青年の双眸は不機嫌に曇っている。
そんな遣り取りの間も、藤季は彼女たちを睨みつけていた。
「貴き方々には、もっと相応しい獲物がございますでしょう⁉　どうかその男はわたしにお譲りください。わたしはずっと、その男で遊びたいと思い続けてまいりましたの」
どうか邪魔なさらないでください。
言葉遣いこそ敬語を保ってはいるが、その声も口調も苛立ちと敵意に満ちている。
間違いない。
藤季はチェリクを上位魔性だと誤解しているのだ！
確かにその美貌は人間というより魔性に通じるものがある。気配も性格も、人間よりは魔性に近い。その尋常でない力のほども――。
なにやら段々、誤解しているのは自分たちのほうではないのかという気分が広がっていくの

は何故なのか。

そして、この誤解を果たして解くべきか否か。

どちらにしたところで、藤季の行く末に大差はないかもしれないが、彼女のためにはどちらがましだろうか。

そんな埒もないことを考えていたアーヴィヌスは、チェリクが一歩、藤季に向かって近づいたのに気づくのが遅れた。

「なかなか愉快な勘違いをしてくれたお礼に、一度だけ選ぶ機会をあげるわ、虎の威を借る狐さん」

名など、その瞳に宿る力を使えば、読み取ることなど造作もないだろうに、チェリクはあえて藤季の名を呼ぼうとしない。

「皇の言葉を理由にせず、あなた自身が決めなさい。あなたはどうしても、アーヴィヌスと遊びたい？　もう少しだけ、待つつもりはない？」

意外な問いに、アーヴィヌスは内心首を傾げた。

チェリクの意図がわからない——血臭を纏う藤季を前にしながら、彼女はこんなことを尋ねる人間だったろうか。

読み取った流れのままに、問答無用でその運命を決するのが彼女ではなかったろうか。

それとも、チェリクの見た藤季の運命は、変わる可能性を秘めていたというのか。
困惑する彼と違い、チェリクを知らない藤季は、彼女の言葉をつまらぬものと判断したらしい。
鼻で笑いながら、傲岸に応じた。
「ご冗談でしょう。ここで退き、あなたがたがその男で遊び終わるのを待てと？　その男が無事にすむ保証もないのに？　いいえ、いいえ。何よりわたしは今、その男で遊びたい……その男がわたしの爪で引き裂かれるさまを存分に堪能したい。待たねばならぬ理由がどこにあるというんです？」
その言葉に、チェリクは短く「そう」と頷いた。
そして、その直後――。
「アーヴィヌス」
振り返ることもせずに、彼女がアーヴィヌスに何かを放ってよこした。
「何を」
顔を直撃しそうな勢いで飛来したそれを、咄嗟に摑んだ彼は、その感触と重みにはっと息を呑んだ。
巻き貝の化石に虹の七色の象眼を施した――それは彼自身の封魔具だった。

「虹貝？」

保管庫にしまってあるはずのこれが、なぜここにあるのか――悲しいことに答えはすぐに思い浮かんだ。

以前、真夜中に現れたチェリクが言っていたではないか。浮城を護る護り手の三分の一は、自分が集めたのだと。

彼らは快く自分を通してくれたのだ、と。

きっとこれも、その内の誰かが彼女のために保管庫を開けたのだ――。

「チェリク……」

助けられた身で、こんなことは言いたくない――言いたくはない、が。

あなたは、もう部外者なのに、なにわたしより自由に好き勝手やってるんですか。

声には出さずに洩らした言葉は、非難というより愚痴に近かった。

そんな彼の心中を知ってか知らずか、漆黒の髪の魅了眼の主は、優しくないことを言ってくれる。

「昔、何度も言ったでしょう？　いつでも一個は封魔具は持ってなさい、と。どこで何が起きるかわからない世の中なんだから、最低限の備えは欠かさないようになさい、と。書類と向き合うばかりだからと油断するから、こんな目に遭うのよ」

それは、先ほどアーヴィヌスが痛感したばかりのことだったが、改めて指摘されるとやはり心が痛い。

ずけずけした物言いは昔から変わらない。容赦を知らぬ叱責に、若い頃の自分は何度心が折れそうになったことか……だが、それらの言葉が、何度も自分の命を救ってくれたことも紛れもない事実なのだ。

彼女に鍛え上げられた日々がなければ、今自分はここに立ってはいられなかったかもしれない。

だから、言葉はするりとこぼれ落ちた。

「……以後、肝に銘じます」

昔に返ったような、不思議な思いを味わいながら、そう答えると、昔と変わらぬ絶世の美女はどこまでも偉そうに「よろしい」と頷いた。

だが、彼女は昔と全く同じではなかった。

「では、アーヴィヌス。この慮外者をどうするのかは、あなたが決めなさい」

封じるか、散らすか――。

意外すぎる言葉に、思わず目が丸くなった。

「チェリク……？」

問いかける声に、彼女はようやくこちらを振り向いた。
魔性に通じる絶世の美貌――そこに浮かぶのは柔らかな笑みだった。
「浮城の城長はあなたでしょう？　護り手の監督はあなたの務めのはずよ」
城長はあなたでしょう――あなたでしょう。
頭の中で、谺のように、何度も同じ声が同じ言葉を繰り返す。
胸の奥が、じんと熱くなった。
認めて、くれるのか、あなたが。
あなたたちに比べ、実力不足で後手にばかり回るような情けないこんな自分を。
それでも、浮城の城長だと。
全身に熱が回る――喜びという名の熱が。
だが、目前の女性は、アーヴィヌスがいつまでも感動に浸ることを許してくれるほど優しくはなかった。
「アーヴィヌス？」
声に険が宿る――まずい兆候であることを、彼は身を以て知っていた。
「……わかっています」
虹貝を固く握りしめながら、アーヴィヌスは藤季に目をやった。

「藤季。君が浮城ではなく皇とやらに従うのであれば、わたしは君を放っておくわけにはいかない」

いつ牙を剝くかしれぬ護り手など、浮城に置いておくわけにはいかない——また、浮城の事情に通じた魔性を野に放つわけにも。

護り手に関する責任は、城長たる自分にある。

そうである以上、この務めを他者に委ねるわけにはいかないのだ。

「わたしは、君を封じるよ」

いつの間にか、傍らから漆黒の青年の姿は消えていた——。

3

「リーヴィ？　どうしました？」

すぐ傍から聞こえた声に、リーヴシェランは思わずそちらを振り向いた。

よく知る声――誰より馴染んだ声の主なのに、なぜその声に驚いてしまったのか、彼女自身よくわからない。

ただ、いつもと変わらぬその声を耳にした瞬間、心臓がぎゅっと摑まれたような気がしたのだ。

痛くて、痛くて、痛くて、熱い。

「リーヴィ？　何を驚いた顔をしているのです？　どこか痛むのですか？」

漆黒の双眸を心配そうに翳らせて、顔を覗きこんでくるのは最愛の護り手である女性だ。

「彩糸」

「ええ、リーヴィ。どうしたのです、喉の調子がおかしいのですか？」

そう言われても仕方ないほどに、声が掠れてしまっていた。
けれど、その理由がやはりわからない。
「待っていて、すぐに生姜茶を用意しましょう」
そのまま、茶を淹れるために離れようとする護り手の腕を、リーヴシェランは反射的に摑んだ。
「いい！　いらない！　お茶なんていいから、離れないで！」
自分でもわからない不安と恐怖に、彩糸の腕を摑む指に力がこもる。
「リーヴィ？」
過保護な護り手は、痛いとは言わず、優雅な指を彼女の金髪に伸ばした。
やさしく、撫でられる。
リーヴシェランが弱っている時、彩糸は必ずこうして頭を撫でるのだ――まるで小さな子供を相手にするように。
それはかつて、姉であるマーセルヴィンスがよくしてくれたことだった。
「何か怖いことでも想像したのですか？　それとも、昔のことでも……？」
思い出しましたか？
問われて、自分が今何を考えていたのか思い出そうとして、上手く思い出せないことに気づ

いた。

何だろう——別にぼんやりしていたわけじゃないのに、どうして何を考えてたのか思い出せないのかしら？

「……よく、わからないの。ただ、何だか無性に不安になって……」

優しい指が、今度はリーヴシェランの頬に触れた。

覗きこんでくる彩糸の瞳には、慈しむ光が浮かんでいた。

「感情が揺れたのね。大丈夫、リーヴィの年頃ではよくあることですよ……体だけでなく、心も大人になりかけている証拠です」

だから、何も心配することはないのだと告げられて、リーヴシェランはこくりと頷いた。

彩糸は、自分のことを誰よりわかってくれている——だから、彼女がそう言うのなら、この不安は単なる感情の揺れが生み出した幻のようなものなのだ。

そう——思うのに。

違う。

胸の奥から、小さな小さな声が訴えかけてくる。

違う、違う、と。

何が違うのか問いかけたいのに、何故かそれも恐ろしい。いっそ聞こえなければいいのに、

胸に刺さった棘のように、ちくりと痛む部分から、小さな声は繰り返すのだ。
「彩糸」
「なんですか、リーヴィ？」
首を傾げる女性の首に腕を回して、リーヴシェランはきゅ、と抱きついた。
「彩糸、彩糸、彩糸」
耳元で、女性が笑う気配がした。
「はいはい、どうしました？　大人になりかけている証拠を示した矢先に、今度は小さな子供に戻るなんて、リーヴィは器用な真似をしますね」
からかうような声音に、感情が刺激される。
「茶化さないで」
「茶化してなどいませんよ……本当に、どうしました？」
声に心配そうな響きが宿るのを聞いて、リーヴシェランは一瞬後悔した。
こんな声を聞きたいわけではない。心配ばかりかけている自覚はあるけれど、わざとそうしているわけではないのだ。
彩糸の笑顔を曇らせたいと思ったことなど一度もない。
「彩糸はずっと、一緒にいてくれるわよね？」

紫紺の妖主によって手がけられた人形――その手を逃れて、自分のところに来てくれた。
今では主の許しも得、彼女はリーヴシェランのそばにいる。いてくれる。
「ええ、リーヴィ。あなたがわたしを要らなくなるまで、ずっとそばにおりますよ」
心まで包みこんでくれる穏やかな声に、彼女はぶるぶると頭を振った。
「ならない。要らなくなんて、絶対ならない。ずっと一緒にいてくれなきゃいやよ」
約束して、お願いだから。
言っているうちに、なぜか涙がこみ上げてきた。
何だろう。
駄々をこねる子供のようだとわかっているのに、彩糸からの約束が欲しい。どうしても欲しい。
「彩糸。お願い、彩糸。約束して」
離れないで。
どうかいなくならないで。
「彩糸、彩糸」
すがりついて、言葉を請う。
そうせずにはいられなかった。

「お願い……っっ！」
「約束しますよ、可愛いリーヴィ。ずっとそばにいます。あなたがこの世にある限り、わたしの還る場所は、あなたのところしかないのですから」
愛してますよ、愛してます。
滅多に口にしない言葉を歌のように囁きながら、彩糸がリーヴシェランを抱きしめる。
そのことで、ようやく彼女は安心した。
大丈夫だ……これで、もう心配することはないのだと。
「彩糸、彩糸、大好きよ」
マーセルヴィンス姉さまも彩糸も、どちらも同じくらいに大好き。
「ええ、リーヴィ、わたしもあなたを愛してますよ」
いつまでも、どこに在っても——。
「そんな言葉はいらないわ。ずっとそばにいてくれなくちゃ」
唇を尖らせながら、小さな不満を洩らすと、耳元で女性がくすくすと笑った。
それと同時に、不思議な小さな音が聞こえた。
さらさら、さらさら、さらさら——。
水の流れる音のような、いや、もっと乾いた……そう、砂時計の砂が落ちる音が。

何の音だろう。
内心首を傾げながら、けれどその正体を知ろうとは思わなかった。
胸の奥から、また小さな声が聞こえたのだ。
嘘つき、と。
泣きそうな小さな子供の声が、「嘘つき、嘘つき！」と叫んでいる。
何を言っているのだろう。
嘘つきとは誰のこと？
この小さな子供は誰をこんなに責め立てているの⁉
「リーヴィ？」
リーヴシェランの不安がまだ治まらないのかと、彩糸が心配そうに声をかけてくる。
「何でもない」
何でもないわ、ともう一度呟いて、リーヴシェランは彩糸を抱きしめる腕に力をこめた——そのはずだった。
なのに。
なぜ？
より強く力をこめれば、彩糸との距離は縮まり、その存在を近くに感じられるはずなのに

――どうして。
いくら力をこめても、彩糸に近づけないのだろう？
さらさら、さらさら、さらさら、さらさら。
砂の流れる音が、先ほどより近くで聞こえる。
なぜ――どうして。
さらさら、さらさら、さらさら、さらさら……。
音がどんどん大きくなる。
「彩糸、これは何の音？」
尋ねる声に、求める声は返らない。
「彩糸、彩糸ったら！」
聞こえないの!?
不安と苛立ちのまま、顔を上げたリーヴシェランは、そこに信じられない……信じたくない光景を見た。
しっかりと抱きしめたはずの彩糸の姿が、乾いて崩れる砂の城のように、腕の中で崩れていく。
嘘だ、嘘だと何度も自分に言い聞かせ、瞬きを繰り返したけれど、視界に映る光景は変わら

ない。

乾いた砂が崩れ落ちて、彩糸の輪郭が失われていく。

「や……」

これは何だろう……いったい、何が起こっている⁉

「いやだ、彩糸。ふざけないで……」

こんなの、悪趣味すぎるわ。

こんなことで、わたしを驚かせようとするなんて、あなたらしくないじゃない。

「彩糸！　彩糸ったらっっ！　ふざけるのもいい加減にして！」

すぐにこの悪ふざけをやめないなら、わたしは本気で怒るわよ！

怒気を叩きつけて怒鳴りつけても、彩糸の崩壊は止まない——それどころか崩れる速度は増すばかり。

もう、怒りを持続することなどできない。

心が凍りそうな恐怖が、リーヴシェランを支配する。

「いやよ、いやよ、いやよっっ！　こんなのはイヤっっ！」

同じような叫びを、同じような思いで上げたことが、あるような気がしたけれど。

そんなはずはなかった。

こんな絶望が、二つもあるはずがない。
「彩糸、彩糸、お願い、彩糸っっ！」
返事をして。
お願いだから、わたしを呼んで。
そばにいて。離れないで。
「いやよ、いやぁぁぁっっ！」
必死に伸ばす手は、彩糸であった砂粒に触れるだけ――こんなものは彩糸ではない。
彩糸に触れたいのに、どうして触れられないの⁉
彩糸は――彩糸はどこにいるの⁉
絶望が心を押し潰す。
腕の中で崩れ落ちた彩糸――二度と取り戻すことはできない。
彼女は二度と戻らない。
この手を彼女が握り返してくれることは――。
けれど。
「リーヴシェラン！」
彩糸のものでない温もりが、リーヴシェランの指先に触れた。

呼ぶ声も、彩糸のものではないのに、なぜか心に触れてくる。
知っている——自分はこの温もりを、この声を知っている。
そう自覚した瞬間、リーヴシェランの意識はその場を離れた。
光も何もない奈落の底から、ゆっくりと意識が浮上する——遙か上に見える、揺らめく光を求めるように、ゆらゆらと意識が浮かび上がっていく。
ああ、とリーヴシェランはこの時、自分の状態を完全に自覚した。
自分は、目覚めようとしているのだ、と——。

※

頭が痛い。
体の節々が痛い。
特に喉がひりひりする。
最低の気分だ。だが、何より最低なのは——。
「リーヴシェランっ！　おい、リーヴシェラン！　しっかりしろ！」
耳元で響き渡る騒音だ。

止めてよ、怒鳴らないでよ、鼓膜がおかしくなっちゃうじゃないの！
怒鳴り返して、ついでにこぶしの一、二発見舞ってやりたいぐらいだが、騒音でありながらそこに宿る響きがあまりに必死で懸命なものだったので、うるさいのに手が出せない。
だが、それも程度問題というものだ。
「リーヴシェラン！　頼むから目覚めてくれよっっ！」
わめき声を上げながら、どうやら声の主はリーヴシェランの手を握りしめているらしい。
ぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅうと、力加減という言葉も知らぬのか、思い切り力をこめてくる——はっきり言って痛かった。
「リーヴシェラン！」
ああ、もう——リーヴシェランの我慢が限界に達する。
鼓膜が痛い。指先も痛い。ただでさえあちこち痛いのに、この声の主は自分をどうするつもりなのか。
「……うるさい」
ぼそりと洩らした声は、自分でもぎょっとするほど掠れており、しかも喉がひりひりと痛んだ。
ああ、最低だ。

声を出すのがこんなに苦痛なのは、子供のころ高熱を出した時以来のような気がする。喉が腫れて声を出すのは勿論、水を嚥下することさえ難しかった。

あの時以上にあちこち痛いのに、最低な騒音の主のせいで痛む喉を酷使しなければならないだなんて——本当に腹立たしい。

なのに、騒音の主ときたら、彼女の苛立ちも怒りもまるでわかっていない様子で、安堵も露な声で、またしても名を呼んでくるのだ——しかも、こちらからの返事を熱烈是非とも求めてますとでも言いたげな声で。

「リーヴシェラン？」

本当に、最低。

一声だって上げたくないというのが正直なところなのに、こんな声を上げられては無理を圧しても返さなければならない気になってしまうではないか。

「……だから、うるさいって」

言ってるじゃないの。

声にするのも面倒で、最後のほうは唇だけ動かした。

何とかそれは伝わったらしい——騒音としか思えなかった声が少しだけ声を落とした。

「よかった、目を覚まして」

指を握る力も、心なし和らいだ。
しかし、その発言内容は謎めいている。
良かった？　目覚めて？
馬鹿ではないのか、こいつは、と思った。
人間が眠りから覚めるのは当然のことではないか。魔性の術にでも陥らない限り、人間は眠れば必ず目覚めるものなのだ。
いや、そういえばその手の術にかかって、ずっと目覚めない事態に陥った前科が自分にはあったか……だが、自分が魔性の術中にあるかどうかぐらい、わかりそうなものではないか。仮にも妖主を両親に持ちながら、こいつにはそんなこともわからないのだろうか。
馬鹿か、あんたは。
喉の痛みがなければ、思い切り馬鹿にした声で言ってやりたかった。
けれど。
「よかった……」
馬鹿みたいに繰り返す声を聞いていたら、どうしてもその顔が見たくなって。
どんな顔をして、こんな馬鹿みたいなことを繰り返すのか、どうしても知りたくなって――
仕方がないから、重い瞼を持ち上げてみれば。

案の定、だ。

両親譲りの絶世の美貌――普段は子供っぽい性格が全面に出ているために、そうとは思えないのだが――をくしゃくしゃに歪めて、泣きそうな顔をして自分を見ていた。

なぜ、こんな顔をしているのか。

理由を知りたいと思わなかったわけではないけれど、それよりまず、こんな顔を止めさせるのが先だと思った。

「ばーか」

痛む喉に力をこめて、なるべく軽く聞こえるような声を上げる。

だるい腕を持ち上げて、その乳白色の柔らかい髪を指先に搦めて。

わざと乱暴に引っ張った。

「なんて顔してるのよ」

言えば、ぶっきらぼうな声が返ってくる。

「知るかよ。自分が今、どんな顔してるかなんて……」

「じゃあ、教えてあげるけど、酷いものよ」

せっかく、元は良すぎるぐらいに良くできているのに――とは、敢えて言わないでおく。

実はいつもそう思っていることを、わざわざ教えてやる気はない。

「今にも泣き出しそうな、子供みたいな顔」
こんな顔を、いつまでもされていたらこちらの精神衛生上、非常によろしくない。
だから。
「何があったか知らないけど……泣きたいなら、泣けば？」
きっと、そのほうが早道になる。
泣くのを必死に我慢して、悲しみを堪え続けるより、泣くだけ泣いて涙で思いを浄化したほうが――。
だが、この言葉に、邪羅は予想外の言葉を返してきた。
「じゃあ、お前も泣けよ。おれだけ泣き顔晒すなんて、不公平だろ。お前も泣け。お前の泣き顔もおれに見せろ」
何を馬鹿なことを言い出すのか――こいつは本当に馬鹿ではないのか。
そう思い、反論しようとしたリーヴシェランは、けれど、喉の痛みのせいではなく、声が詰まるのに気づいて驚いた。
何だろう、目が熱い。
何だろう、頬に何かが伝って落ちる。熱い何かが、後から後から溢れ出て、頬を濡らして止まらない。

その涙の理由を、彼女が思い出すのはもう少しだけ先のこと――。
記憶でなく意識でなく、ただ心が悲しみを吐き出したのだ。

4

「正直なところを言わせていただくなら、意外でした」
藤季の命を封じた虹貝を懐にしまいながら、アーヴィヌスはただ自分たちふたりの戦いを静観し続けた先々代の城長である女性に告げた。
漆黒の髪と極上の緑柱石の双眸を持つ美女は、悪戯っぽい笑顔で応じた。
「わたしが参戦しなかったことが？　そんなにわたしは好戦的に見えるのかしら？」
違うとは言い切れない――だが、ここでそれを正直に明かしても、我が身に益となることはなにもない。
過去の経験から、充分すぎるほどにそれを学んだアーヴィヌスは敢えて矛先を逸らした。
「いえ、それ以前に、あなたが自身でケリをつけようとしなかったことが、です」
以前のチェリクには、自ら先陣を切ることを心に期しているようなところがあった。
養父であるイズヴァンとともに行動する時ばかりは、彼の言いつけを守り、決して先頭に立

つような真似はしなかったようだが――魅縛師が戦闘に参加すること自体異常なのだが、彼女にその自覚はなかった――彼の目が届かない場所では、とにかく前に出たがった。

それが目立ちたいからだとか、あるいは成果を上げたいという功名心からのものであれば、周囲もそれを諫め、押しとどめることができた。

功名に走る人間ほど、仲間として危険な存在はなく、そうした人物を抑えることはチームを組む上で何より重要とされるからだ。

だが、生憎彼女の行動原理はそれとは真逆のものだった。

浮城史上類を見ない強力無比の魅了眼の持ち主は、その眼差しだけで相対する魔性の真名さえ容易く読み取り、その命を解くことさえできる力を有していた。

そして、一見そうは見えないが、彼女は自分より弱い同僚に対しては、強い庇護欲を持つ女性でもあった――これは養父の影響が非常に大きいと思われるのだが。

同僚を危険に晒すより、自分が前に出たほうが安全かつ迅速に事態の終息を図ることができる――彼女以外の者が口にすれば、驕り以外の何物にも聞こえないだろう言葉は、しかしながら彼女に関してだけは完全な事実だった。

それゆえに、実力的に彼女に劣る自覚のある人間は、彼女の行動に否やを唱えられなかったのだ。

結果、チェリクは最前線に立つ異色の魅縛師として名を馳せることになった。
アーヴィヌスも、出会ったときからそんな彼女しか見たことがなかった――誰かを危険にさらさぬために、自ら真っ先に危険な場所に飛び込んでいく。そんな彼女の背中ばかり見ていたから、彼女はいつでもそうなのだと思い込んでいた。
だから、先ほどの彼女の言葉には、心底驚かされたのだ。
「あなたはいつも……少なくともわたしが知る限り、誰かに危険を承知で任せることはなかったものですから」
それはつまり、自分の力量不足を突きつけられるということだ。
彼女が信じて頼るほどの力を自分は持たないのだと――。
常に指摘されているような気がして堪らなかった。
今にして思えば、チェリクの強引なまでの配慮も理解できないことはない――彼女ほど圧倒的な力を持っていれば、少しでも不安を感じる相手を危険に晒すぐらいなら、自分で片付けたほうが早いと思ってしまうだろうことは。
だが、若かったころの自分には、それが耐え難い苦痛だった――その鬱屈を、つい先ほどまで引きずるほどに。
皮肉でなくそのことを語ると、チェリクは非常にばつが悪そうな顔になった。

「……ああ、そのあたりのことに関しては、悪かったと思っているわ。イズヴァンにもさんざん言われていたのだけれど……お前はひとを信じて任せることを覚えろって」

自分の行動に問題がある自覚は、どうやらあったらしい。

但し、自覚はあっても実践に移すことはなかったようだが。

「……そうですね。ですが、あれは圧巻でしたよ、妖鬼をびしりと指さして、『駄目だ、お前は改めない』と断罪するさまは、彼らよりよほど恐ろしくも強大な存在に見えました」

皮肉のつもりはなかったのだが、どうやらチェリクはそうは受け取らなかったらしい。

「やめて。他人に指摘されると、何恥ずかしいこと言ってるんだって思い知らされるのよ！　言ってる最中は魅了眼に集中してるから気づいてない分、余計に恥ずかしいの！　マンスラムにはその件でどれだけからかわれたことか……！」

真剣に両耳を押さえて叫ぶその姿は、あの無敵の魅了眼を発揮するときの彼女とはまるで別人に見える。

出会って以来ずっと、化け物だと信じてきた女性が、こんな一面を持っていたとは初めて知る事実で、実に新鮮な気がした。

自分がそれに気づけなかっただけなのか、あるいはチェリク自身に変化があったのか、あるいはその両方なのか。

そんなことを思っていたアーヴィヌスの耳に、くすりと笑うチェリクの声が飛び込んできた――何かと思い、顔を上げれば、楽しげな彼女と目が合った。

「なんですか？」

「いえ、もしかしたらあなたはわたしのことを、また過大評価してるんじゃないかと思って……だとしたら、申し訳ないと思ってしまって」

くすくすと、おかしそうに笑う顔を見れば、どうしても好奇心は湧いてくる。

「どういうことです？」

尋ねると、彼女はまたくすくすと笑った。

これは、誤魔化されてしまうか――アーヴィヌスがそう判断しかけた時だった。

チェリクが「実はね」と口を開いた。

「ほんの少し前までのわたしなら、先ほどの彼女――藤季はさっさと命を解いて終いにしたと思うのよ。それこそ先ほどのあなたの台詞じゃないけれど、彼女には改める気がなかった……わたしには、それがはっきりと見えた。あなたを軽んじるつもりはないけれど、そうするのが一番の早道ではあったもの」

だが、彼女はそうしなかった。

アーヴィヌスを城長と認め、その責任において務めを果たせと――自らは静観に回った。

その理由はいったい何なのか。

どうにも気になり、アーヴィヌスは尋ねずにはいられなかった。

「では、どうしてその一番の早道を選ばれなかったんですか？」

チェリクはすぐには答えなかった。

だが、アーヴィヌスは辛抱強く答えを待った——そうするだけの価値が、その先にあるとなぜかそう思えたのだ。

事実、チェリクの沈黙は、焦らすためのものではなく、言葉を探しているがゆえのものに感じられた。

彼女には珍しいことだが、ならば尚更待つ価値はあると彼は判断した。

そうして、ようやく口を開いた彼女は、ぽつぽつと語り出したのだ。

「ラスが……娘がね。言ったの、世界は今、大きく揺らいでいるのだと。だとしたら、流れがひとつしか見えなくとも、それが絶対とは言い切れないんじゃないか、って」

世界自体が揺らいでいるのなら、見える流れも絶対のものとは言い切れない——あの子の言い分にも一理あると思ったの。

だから。

「ひとまず、この目に見える流れについては棚上げすることにしたの。あの子の言う世界の揺

らぎがいつ、どんな形で落ち着くかはわからないけれど、せめてそれまでは……変わる可能性は残されているんだと、信じることにしたのよ」

だから、アーヴィヌスあなたも。

「藤季という子が得意げに並べ立てた話を、あまり信じすぎないようにしなさいね。世界が揺らいでいるのなら、確定した未来なんかないということなのだから」

そう話を結ぶと、チェリクはにこりと笑った。

思わず見とれるほどに鮮やかな笑顔で、だが彼女はこれまでの感動的といってもいい話の流れを台無しにしてくれた。

「あなたは昔から、勝手に怖い想像を膨らませて悪いほう悪いほうに考えていく癖があるから心配なのよ」

アーヴィヌスの生涯最初にして最大の恐怖の発生源による無神経この上ない発言が、彼の心にいかなる影響を及ぼすこととなったのか――。

恐らく元凶たる本人が知る日は来ない。


夢の通い路

プロローグ

幼(おさな)い頃、眠ることは彼女にとって恐ろしいものだった。
眠れば必ず訪れる夢の世界は、彼女にとって優しいものではなかったから。
見知った場所を夢に見たことはなく、見知ったひととそこで会ったこともない。
夢の世界は、幼い彼女にとって、恐ろしい『追われ続ける』世界でしかなかった。
誰も知るひとがいない。
自分を見つけたひとは皆、恐ろしい顔をして追いかけてくる。
かけられる言葉も向けられる表情も、表向きは親しげで優しげなものばかりだったけれど、いつも最後は同じ。
『……そうだ』
『……ってしまいたい』
そんな声にならない声を上げながら、みんな自分を追いかけてくる。

怖い――怖い。怖くてたまらない。

だから、彼女は眠るのが怖く、恐ろしかった。

怖いものが追いかけてくるから――捕まってしまったら、頭からぼりぼりと音を立てて食べられてしまうと思ったから。

『それは貴女の心が生み出した怪物に過ぎません。貴女の心が、この世界を恐ろしいと感じているから、夢のなかで追いかけられるのです』

そんなことを言われたこともある。

『だから、心を強く持ちなさい』

と。

『そうすれば、夢の中であなたを追いかける怪物はいなくなってしまいますよ』

と。

言ったひとは両親が自分のために呼んでくれた高名な医師ということだった――子供の自分より、そのひとの言葉のほうが正しい可能性は高いだろう。

そう判断し、彼女は以来、心を強く保つように努めた。

夢の中で追いかけられても、『あなたの怯えや臆する心が、夢の中の怪物を大きく怖く育てるのです。毅然となさい』という言葉を信じて、必死に踏みとどまった。

けれど――。

「……そうだ」

目をぎらぎらと輝かせ、自分を見つめるその相手は、医師の言葉に従っただけでは退けられそうに思えなかった。

なにより、心が訴えていた。

怖い、怖い――このままでは、……れてしまう！

本能的な恐怖に見舞われ、彼女はそこから逃げ出した。

いつもなら、それで終わり。

怖い場所から逃げて、それでお終いにできるはずだったのに、その日に限っては……そうはならなかった。

追いかけてくる――恐ろしい気配が！

いやだ、いや……なぜなの？　なぜ、逃げ切れないの？

これまで、こんなことはなかった。

いつだって、怖いモノからは逃げ切って……逃げ切れて、きたのに。

相手のほうが、速い。

逃げ切れない……追いつかれる！

怖い、怖い、怖い！
誰か助けて！
悲鳴を上げながら、逃げ続けた。
今にも捕まりそうなほどに距離を縮められ、その恐ろしい爪がほんの少しの誤差もなく振り下ろされる危機感に、血の凍るほどの恐怖を味わわされ――。
もう、駄目かもしれない、と思った。
逃げられない――逃げ切ることはできない、と。
早晩あの恐ろしい手に捕まって、自分はあの声のまま……れてしまうしかないのかもしれないと。
彼女の心の天秤が、絶望に傾きかけたその瞬間――。
彼女は、何かにぶつかった。
全力で逃げている彼女は、これまでぶつかった相手を――夢だからだろうけれど――いつも吹き飛ばしてきた。
今度もそうなるだろう、と彼女は思った。
だが、そうはならなかった。
「おや」

ぶつかって、自分のほうが弾き飛ばされそうになる。
そんな自分の腕を、逆に摑まえて、そのひとは自分を引き寄せ、しっかりと抱きしめてくれたのだ——ぶつかったそのひとは！
怖い、怖い、怖い——助けて、誰か助けて！
夢の中、何度繰り返してもかなうことのなかった望み。
それを。
そのひとは、あっさりかなえてくれた。
追いかけてくる、怖い気配を放つ何か……が、ふっと臆したように動きを止めた。
そのひとのせい、だとしか思えなかった。
そして、それは正しかったのだ。
小さな自分をしっかりと抱きしめたそのひとは、追いかけてきた恐ろしいモノを、一言で退けた。
「窮した雛鳥が、わたしの胸に飛び込んできた以上、人間すら守る規則をわたしが破るわけにはいくまいね」
そう、告げて。
守ってくれた。

その日以来、彼女にとって、眠ることも夢を見ることも、恐ろしいことではなくなった。眠ること、夢を見ることへの恐れを取り除いてくれたそのひとを、彼女が慕うのは当然のことであり、そのひともそんな彼女を疎む様子を見せなかった。

それが、とても嬉しかった。

本当に、嬉しかったのだ。

1

その日、カラヴィス大公国第一公女であるマーセルヴィンスは、大きな喜びとともに母の枕元を訪れていた。

傍らには幼い弟であるソルヴァンセスもいた。

ともに波打つ金髪に、澄み渡る瞳を持つ姉弟は、この日、生まれて間もない妹に初めて会うことを許されたのだ。

母の枕元で、おくるみに包まれた小さな命を、ふたりは心からの喜びで見つめた。

生まれたばかりの赤子は猿に似ていると、どこかで聞いたことがあるが、小さな妹は全然そんなことはなかった。

髪こそ少ないけれど、産毛のように細いそれは綺麗な金色で、肌だって綺麗なクリーム色をしている。

目こそまだ開いてはいなかったが、閉じたままでも美しく可愛らしいことに違いはなく、マ

ーセルヴィンスはふう、と息をついた。

「なんて可愛らしいのかしら、わたくしたちの妹は……ねえ、そうは思わない、ソルヴァンセス？」

五歳になったばかりの幼い弟が真剣な顔で、頷く様子に周囲からは微笑ましいとでも言いたげな笑い声が上がった。

「どうして、皆笑うのかしら？　本当にこの子は綺麗で可愛いと思うからそう言っただけなのに……身内の欲目を抜きにしても、わたくしの妹は可愛いと思ったのだけれど……？」

マーセルヴィンスのこの台詞に、周囲の笑い声が一瞬静まった。

十に満たない子供の口から『身内の欲目』などという言葉が飛び出したことに対する驚きがそうさせたのだが、彼女は自分がまた失敗したのだろうかと不安を覚えた。

マーセルヴィンスは、時々自分が失敗することを自覚していた。

周囲の意表を突くような真似は極力避けるべきだとわかっているのに、どうしても時折つい、やってしまうのだ。

その度、周囲の大人たちは彼女の早熟な知性と精神を慌てて褒めようとするのだが、そのことを両親が歓迎していないことは明らかで、彼女は自分の未熟さを痛感する。

どうしたものかしら？

内心首を傾げ、この場の空気をどう落ち着けるべきか考え込んだ彼女を救ってくれたのは、隣にいた弟だった。

「姉上。わたしたちの妹は、本当に可愛いですね！　生まれたばかりの赤ん坊はお猿さんにそっくりでちっとも可愛くないと聞きましたが、全然そんなことはありませんね！　きっと、自慢してるように思われないように、みんなわざと嘘を言うんですね。どうしてそんな嘘をつくのかわたしにはわかりませんが」

将来カラヴィスを担う身として、多くの教師をつけられたソルヴァンセスの言葉に、今度は誰も笑いを止めなかった。

「そうね、わたくしにもわからないわ」

でも、本当に可愛い。

生まれて間もない妹を見つめながら、マーセルヴィンスは夢の中でしか会えない導き手を思い出し、少しだけ恨めしく思った。

自分が、周囲の求める理想の公女像から外れがちになってしまうのが、その相手による薫陶故だと気づいているからだ。

兄さま。

そう呼んでいる、夢のなかでのみ会うことのかなう、不思議で綺麗なひと。

いろいろなことを教えてくれる一方、それがマーセルヴィンスの生きる世界に通用するとは限らないことも多いため、彼女は常に情報の取捨選択に悩まされる。

今夜お会いできたら、文句を言わなくては。

兄さまのせいで、またおかしな目で見られてしまいました、と。

このままでは、早晩わたくしは変わり者として弟や妹から引き離されてしまうかもしれません——そんなことは絶対に御免なので、どうか責任を持ってそうならずにすむ方法を考えて、わたくしに教えてください——と。

伝えることが、いくつもできた。

だから、きっと今夜は夢であのひとに会えるだろう。

問いたいことや訴えたいことが幾つか溜まると、なぜだか夢で会えるのだ。

だから、きっと今夜も——。

まだ遠い眠りの時を、マーセルヴィンスはうっとりと待ち望んだ。

※

夢に出てくる景色は、いつもこの目で見たことのない場所ばかりだ。

今日は、一面が雪に覆われた純白の世界だった。
とても美しい。
しんと冷え切った空気が、自分の知るどんな場所より澄み切っていて、マーセルヴィンスは大きく息を吸った。
幸いなことに、周囲には誰もいない——自分が見つけられて、怖い視線を向けられる心配がないことにひとまず安心して、彼女は大好きなひとを呼び出す呪文を口にした。
「兄さま。ラン兄さま」
ただ一言——出会ってすぐに、教えてもらったその呪文が、効かなかったことはない。
呼べば、そこがどこであれ、大好きな綺麗なひとが来てくれる。
それは、今日も同じだった。
背後の空気がふわりと揺れた。
次の瞬間、マーセルヴィンスは背後から自分を抱きしめてくる、優しいひとの気配に笑みをこぼした。
「兄さま。今日は嬉しいご報告と、ちょっとだけ文句が言いたくてお呼びしましたの」
背後で小さく笑う気配。
優しく柔らかい青年の声が彼女の耳をくすぐった。

「それは、楽しみなのと怖いのが半々だね。わたしの小鳥はわたしを怖がらせるのが上手だから」

嘘つき。

ちっともそんなこと思ってないくせに、兄さまはいつもそう言う。

けれど、少しでもそうならば、どれほどに嬉しいか——思わずにいられないから、マーセルヴィンスはいつも気づかないふりをする。

「では、どちらを先にお聞きになりたい？　今日はわたくし、とても嬉しいことがあったので、兄さまの望まれることを優先いたしますわ」

クスクス笑いながらそう返すと、耳元で落胆したような息をつかれた。

「わたしの小鳥。現での口調が残っているよ。わたしと会うときは、出会ったころそのままの、心からの言葉だけを口にするよう言ったのに」

心底がっかりしたように言われると、心の奥がつきりと痛んだ。

けれど。

「あまり難しい注文をなさらないでくださいな。わたくしはわたくしで、昔のように振る舞えないからといって、違う姿を演じたり装ったりしているわけではありませんのよ」

今度はこちらからため息まじりに訴えれば、相手が可笑しそうに声を上げた。

「口の減らないわたしの小鳥！　いつの間にそんなに口が達者になったのだろうね」

それは、兄さまのせいでしょう！

今日の昼間のことを思い出し、つい文句を言ってしまった。

「兄さまが、わたくしの年齢などお構いなしで言いたいことを仰るからではありませんか！　今日だって、それでわたくし失敗してしまったのですわ。生まれたばかりの妹が可愛くて、『身内の欲目抜きにしても可愛い』と言ったら、皆が黙りこんでしまったのです」

わたくしはなるべく、皆の期待に応えたいと思っているのに、兄さまとの会話で聞き知った言葉が出ると台無しなのです。

カラヴィスの第一公女として、愚鈍と見なされるなど論外だが、周囲に違和感を与えるような言動は取るべきではない。

そう思うのに、このひとの言ったこと、話したことはあまりにも鮮明に脳裏と心に刻みつけられていて、ふとした拍子に簡単に出てきてしまう。

「おや、妹が生まれたのかい？　もしかして、嬉しい報告というのはそのことだったのかな？」

だったら、茶々を入れてしまってすまなかったね。

耳をくすぐる優しい声。

先回りして謝られてしまっては、マーセルヴィンスは怒ることもできない。
「……そういうところ、本当に狡いと思いますわ」
軽く唇を噛みしめれば、彼はくるりと腕の中の彼女の体を容易く回転させて、顔を覗きこんできた。
一目で魂までも縫い止められてしまいそうな、不思議な色彩の瞳が、真っ直ぐにマーセルヴィンスに向けられる。
「いや、本当に悪かったと思っているよ、わたしの小鳥さん。まさか、そんな喜ばしい知らせを運んできてくれたとは知らなかった」
他の誰も持たないその髪の色は紫紺――双眸はまるで至高の宝石のよう。
狡い。
やっぱり兄さまは狡い。
こんな声で、こんな瞳で謝られてしまったら、いつまでも怒ってなどいられない。
本当に、狡い。
夢でのみ会えるそのひとが、一体何者であるのかを、マーセルヴィンスは長く知ることはなかった。
そう、ひとつの運命が尽きるその時まで。

2

可愛い、可愛い妹の身に尋常ならざる事態が生じた時も、マーセルヴィンスが頼ったのは夢の中でしか会えない『兄さま』だった。

物心つかない妹の周囲には、なぜか魔性が集うのだ。

最初は妹――リーヴシェランを狙って集うのかと思っていたが、どうやらそうではないらしい。

集まった妖鬼たちは、本当に大切そうに妹を守るのだ――そして、そんな魔性たちを妹も受け入れている。

気配に敏感な妹が、カラヴィス王宮でも多くの疑惑に包まれた貴族が近づいた途端、火がつく勢いで泣き出したことをマーセルヴィンスは知っている。

癇の強い子供だと、周囲は見ていたが、そうでないことを彼女とソルヴァンセスは知っていた。

リーヴシェランは邪気というモノに生来敏感なのだということを。

「けれど、普通は魔性のほうが、人間より邪気に満ちているのではないかと思うのですわ。これはいったい、どういうことなのでしょう？」

夢の中――今日は深い森の中、マーセルヴィンスは『兄さま』の隣で大木にもたれかかりながらそう尋ねた。

紫紺の青年との夢のなかでのつきあいは変わらず続いている。

「わたしの可愛い小鳥の妹姫は、どうやら稀有な贈り物をされた子供のようだね」

紫紺の青年が、愛しげにマーセルヴィンスの髪を指先で掬い取り、口づけながらそう答えた。

「贈り物、ですか？」

どういうことかとさらに問おうとした彼女に「動かないで」と青年が告げた。

「兄さま？」

「君は知らないだろうけれどね……今、君の髪は最高に美しい光を放っているのだよ。虹色の髪が光を柔らかく反射して……ああ、本当に美しい」

うっとりと紫紺の双眸を細める姿に、マーセルヴィンスはこそばゆいような心地を味わう。

自分ではわからないけれど、彼の目には自分の髪は虹色に輝いて見えるのだという。現実の自分のそれは金色で、瞳も彼が言うような色ではないのだけれど……夢の中では現の殻は意味

を持たないのだという彼の言葉を信じれば、そういうこともあるのだと素直に信じられた。

だから、彼女も彼の姿に違和感は覚えない。

人間にはあり得ない紫紺の髪もその双眸も——自分の魂がそう受け止めた彼の姿なのだろうと思うからだ。そもそも、夢の中で彼女は見知ったひとの姿を見いだせた例がないのだ。それも、夢の中では誰もが現実とは違う姿をしているのであれば、おかしな話ではない。

ただ、夢の中がこうした状況なら、弟や妹に会っても、すぐにそうと気づけなかったり気づいてもらえなかったりで、ちょっと不便かもしれない、とは思ったけれど。

でも、出会ってからずっと、兄さまがわたくしを見誤ったことはないからいいわ、と思った。

「兄さま、はぐらかさないで。わたくしの妹は、一体どんな贈り物を貰って生まれてきた子なのですか？」

彼女の問いに、彼は答えた。

「魔性をも味方につける、魅縛の力だよ」

ただしそれは、それを厭うモノにとっては殺してでも壊したい力でもある。

恐ろしい宣言に、マーセルヴィンスは青年に縋りついて尋ねた。

「兄さま！　兄さま！　どうしたら、あの子を守れるのです？」

問いに対する答えは簡潔だった。

「どうしても守りたいのなら、君がそばにいることだね」
「……わたくしが？」
「そう、君が」
告げて、紫紺の青年は、そっと彼女の右手首の内側に触れた。
「初めて君と出逢ったあの日……わたしは君に徴をつけた、ここにね。これが最強の護符になる。わたしが守ると決めたきみが、妹姫の傍にいる限り、生半なモノは君にも妹姫にも手を出すことはできない」
ぞくりと一瞬、彼の触れた場所が炎に触れたかのように痺れた。
けれど、告げられた内容に安堵する思いが、マーセルヴィンスの中から不安や衝撃を消し去ってしまった。
「兄さまが守ってくださるから、大丈夫なのね」
自分も妹も。
それが根源的な間違いであることに、この時マーセルヴィンスは気づくことができなかった。
自分に与えられた守護が、あくまでも絶対者の気まぐれによるものに過ぎないことを、彼女は知らなかったのだ。

3

「クワイアのイシアス殿下……ですか？」

大公妃である母に呼ばれた部屋で、持ち出された名前に、マーセルヴィンスは首を傾げた。

「そう……まだ内々の話なのだけれど、あなたへの求婚の許しを求める文が送られてきたそうなの。あなたの意向を重視したいから、と公的な文書ではなく、私的なものとして、ね」

十五になったマーセルヴィンスには、すでに幾つかの縁談が持ち込まれている――ただし、それは父のもとで止められており、本人の耳に入ったのはこれが初めてのことだった。

母から話が来たということは、少なくとも父も悪い話とは思っていないのだろう。ここで自分が頷けば、あっさりと話はまとまるに違いない。

そろそろ、そうした話が来てもおかしくはないと思っていたから、母の話を聞いてもマーセルヴィンスは動揺を覚えはしなかった。

国家同士を結びつけるにあたり、最も有効な手段のひとつとして、婚姻が用いられる以上、

自分にも必ずその時が来ることはわかりきっていた。
カラヴィスの第一公女として、次代の大公――ソルヴァンセス――の姉として、その時が来たら、最善の道を選び取ろうと、ずっと心に決めていた。
だから……彼女にはわかっていた。ここで自分が何を求められているのか――穏やかに微笑んだまま、「ありがたいお話です」と頷けばいいのだ。
幸い、クワイア王国の第一王子であるイシアスとは、三年ほど前に面識を得ていた。十歳年上の、優しそうなひとという印象を抱いたのを覚えている。
あの方と――人生を共に歩むのか。
ときめきはない。だが、彼となら穏やかな愛情を育むことはできるかもしれない、と思った。優しい包みこむような眼差しを、十二の自分に向けてくれたあのひとなら。
そう思い、頷こうとしたマーセルヴィンスの脳裏に、一瞬別の顔が過った。
深い、深い紫紺の髪の、見たこともないほどに綺麗な青年のそれが。
兄さま。
途端に、胸が苦しくなった。
夢でしか会えない彼を、そうした意味で見つめたことはない。どこの誰とも知らぬ相手だ……落ち着いた物腰から、彼がその姿より長い年月を生きてきたことも薄々感じ取っていたか

ら、一度もそんな風に思ったことはなかった。
彼が何者かなど、知る必要はなく、逆に知りたくないとさえ思っていた。
夢の中でだけ許される穏やかな逢瀬の時間――知れば、魔法が解けてしまうかもしれない。
マーセルヴィンスはそんなことは望んでいなかった。
けれど――。
浮かんだ疑問に、彼女は心臓が凍りつきそうになった。
クワイアのイシアス――彼の妻となった身で、自分が夢のなかの『兄さま』の可愛い小鳥で在り続けることは許されるのだろうか、と。
ひとの妻となってなお、夢でとはいえ、血のつながりもない異性と会い続けるのは、許されることとは思えなかった。それでは不貞と何も変わらない。
……では、わたくしは二度と兄さまに会えなくなってしまうの？　本当の兄のように慕わしく思うあのひとに？
それは、これまで受けたことのない大きな衝撃を彼女にもたらした。
だから……彼女は、最初に決めていた通りのことができなかった。
「どうかしら？」
答えを促す母に、笑顔を装って小さく頭を振ることしか。

「……少し、考えさせてくださいな。わたくしは、まだ、生涯の伴侶を求める気持ちより、弟妹を思う心のほうが大きいのです。せめてリーヴィがもう少し大きくなって、そばにいなくても大丈夫だと思えるようになるまでは……」

彼女の言葉に、母であるひとは小さく「そうね」と首肯した。

「急いで進めなければならない話でもないわ。あちらには、もう少し返事を待っていただきましょう。確かに、いまあなたがいなくなったら、リーヴィがどれほど激怒することか……クワイアの世継ぎの君に、何かあっては大変ですものね」

苦笑交じりのその言葉は、まんざら冗談とは言い切れないものだった――魔性に慕われる妹は、確かに危険な力をその手に持っているのだから。

ごめんなさい、リーヴィ。幼いあなたを言い訳に使って――けれど、心配しているのは本当だから……わたくしを、あなたを守る護符として、できる限り長くそばにいさせてちょうだい。

いつか、必ず公女としての務めは果たす――その時までは。

どうか、わたくしから兄さまを取り上げないで。

誰に向けてかもわからぬままに、マーセルヴィンスは胸中で許しを請うた。

※

「どうしたの、元気がないね」
久しぶりに会えたそのひとは、変わらぬ優しさに満ちた声をマーセルヴィンスに向けてきた。
それだけで、泣きたくなるような胸の苦しさを覚えて、彼女はふるふると頭を振る。
さらりと髪をかき上げられる。
その仕種に、思わず顔を上げると、深く鋭い眼差しにぶつかった。
「嘘はいけないよ、わたしの小鳥さん。きみが思うよりずっと、きみの魂は正直だ。いつもは虹色に輝く髪が、今日はまるで別物だ」
マーセルヴィンスには視えない光を、彼の目は彼女の髪に見いだして、いつもこちらの心を暴く。
「きみの髪は、わたしの大のお気に入りなんだよ。それを曇らせるのは、きみ自身でも許しがたい。さあ、悩みがあるならわたしに打ち明けてごらん。君より長く生きている分、相談に乗れるかもしれないよ」
そう言いながら、彼はマーセルヴィンスを抱き上げた。
目線を合わされ、彼女は息をついた。
優しい兄のようなひと——けれど、彼は時々驚くほど頑固になることがある。

真っ直ぐに目を合わされた時は要注意だ。
こういう時の彼は決して退いてはくれないのだから。
マーセルヴィンスは諦めて、縁談が持ち込まれたことを打ち明けることにした——せめてそれぐらいは明かさなければ、彼に何もかも暴かれてしまう。
「……覚悟はしていたし、今さら驚いたわけでもないのです」
ぽつりぽつり——彼女は告げてもいい言葉を胸の内から拾い上げていった。
「けれど、そのひとと生涯を共に歩くのだと思ったとき……」
浮かんだのはそのひとの顔ではなかった——それが誰のものだったかまでは、彼女は告げる気はなかった。
「……義務や責任で人生の伴侶を選ぶなど、いいことではないよ、わたしの小鳥さん」
染みいるような優しい声は、清水のようにマーセルヴィンスの心を潤した。
「きみの光が証明している。きみは、きみが思っているほど器用ではないんだよ。愛するひとと人生を歩みたいと、きみの魂は望んでいるのだよ。わたしも、そうしたほうがいいと思う」
そう言って微笑む青年から、マーセルヴィンスは目を逸らすことができなかった。
「兄さま……兄さまご自身も、そう思われているのですか？」
浮かぶと同時に唇から放たれた問いは、彼女が何より知りたいことだった。

だが――。

「ああ。思っている。本当に、これほど幸せなことはないと」

返された言葉は、刃のように彼女の心を引き裂いた。

彼にはいるのだ――共に在ることが至上の幸福だと思えるひとが。

そして、いま彼はそのひとと共に生きているのだ。

だからこそ、彼はこうも優しくあれるのかもしれない――気づくべきではないことに、気づいてしまったマーセルヴィンスは、深く息をついた。

「……そう」

口にできる言葉は他になかった――どんな虚勢も偽りも、目の前の青年には通用しない……暴かれたくなければ、沈黙を守るしかないのだ。

「そうなの」

もう一度呟いて、彼女は心に鍵をかけた。

自覚すると同時に散ってしまった想いを、彼の目から隠すために――。

4

久しぶりの主の帰還に、璃岩城は沸き立った。
最愛の女性を罠にかけ、酔狂にも人間としての蜜月を味わっている紫紺の妖主が、居城であるこの場所に戻ってきたのは数年ぶりのことだった。
配下であり、この城に集うことを許された妖貴たちは、久方ぶりに見る全き主の姿に歓喜したが、王が与えた喜びはそれだけだった。
留守を守る腹心の部下さえも無視して、城の主は自分以外立ち入ることを許さぬ部屋に閉じこもり、姿どころか気配すらも感じさせない。
閉ざされた扉に、焦がれる眼差しを送りながら、しかし誰もそこに触れることはしない……
長年紫紺の妖主に仕えてきた妖貴たちは知っていたのだ。
戻ってきた主が纏っていた不穏な気配のその意味を。
主の機嫌は、ひどく悪かった。

最愛の妻と呼ぶ女性との間に、男児が生まれたのは数年前のこと――満たされた日々の中、彼があれほど気配を尖らせた姿を見せたことはない。

一体、何事が起こったのか。

知りたくとも、主を包む空気は鋭利すぎて、誰も立ち入ることはできなかった。

そう……第一の腹心である津々螺でさえも。

何が彼を苛立たせているのか――知る術を持つ者はいなかったのである。

※

世界はいくつもの薄膜を纏っている。

人間が、魂のみとなっても、行き交えるのは、その一番中心の部分だけ――薄膜一枚、人間は破ることができない。

だが、世界はその中心部のみで構成されているわけではない。

薄膜と薄膜の間にも、いくつもの空間が存在し、それらは幾層にも重なっている。

魔性にしか感知できず、行くこともできない場所。

そこに、人間としか思えぬ魂が現れることがある――と、その噂を耳にした時、紫紺の妖主

である藍絲の頭に浮かんだのは、最愛の女性にして現在は妻であるひとのことであった。

卑怯を承知で罠にかけ、その記憶を塗り替えてのかのひととの蜜月は、当時も破綻の兆しひとつ見えなかったが、彼は万一の可能性を思わずにはいられなかった。

なぜなら——彼女の記憶を封じた際、植え付けた記憶は「人間たれ」というものだったからだ。

彼女は……最愛の白焔の妖主たる女性は、彼のその暗示に存在ごと縛られている。

すなわち、彼女の魂は人間のそれにしか見えないのだ。

それでも、彼女が魔性の王のひとりであることに変わりはない。厳重な暗示の枷を幾重にかけられようと、その本質が他者の支配を許さぬことは充分にあり得る。

自らを無力な人間だと認識していても、夢の部分で彼女は不完全な解放を得ているのではないのか——自らの暗示の強さが禍し、魔性たちの目には人間の魂にしか見えぬ姿で薄膜の世界を彷徨っているのではないのか。

だとしたら、これほど恐ろしいことはない。

世界の王のひとりであることを忘れ、自らを無力と思い込んだ彼女の魂は、魔性の目には誘惑的にしか映らないに違いないのだ。

自らを守る力も持たぬ——それでいて、奥に異様なまでの力と輝きを秘めた魂。

喰らうことで、その力を得たいと思う者が現れないとは限らない。
それを許すわけにはいかない。何があろうと阻止せねばならない。自分の詐術が原因で、かの輝かしき存在が、欠片なりとも損なわれていいはずはないのだから。
だが、そのために彼女から枷を外すことも藍絲にはできなかった。
愛し愛され新たな命が彼女の中に宿ったことを知っては尚更、彼女との日々を手放すことなど考えられなかった。
誇り高い彼女は、自らを詐術にかけた自分のことを決して許そうとはしないだろう……泡沫のこの日々は、一度壊れれば二度と取り戻すことはできない。
わかっていたから、藍絲は壊さないために、噂の人間の魂を探した。
極上の輝きを放ちながら、人間でしかあり得ない気配を放つという魂の主を——記憶を封じられた最愛の女性のものだと思ったからこそ。
だが——それは、珍しく……本当に珍しいことに、自分の勘違いだったのだと知ったのは、妻のものとは全く違う、小さな子供の魂が、懐に飛び込んできた時のことだった。
虹色の髪に光を纏わせ、泣きそうな顔で胸に飛び込んで来たのは、紛れもなく人間の子供の魂だった——普通人間は、自分の持って生まれた肉体の姿を、無意識に魂に被せるものだが、その子供は違っていた。

人間にはあり得ぬ虹色の髪――極上の闇を映した漆黒の双眸。
魂を透かしてみれば、輝く金の巻き毛と明るい美しい瞳を持つ、稀有な美貌の持ち主であることは知れたが、藍絲の興味を引いたのは、そうした肉体の情報を纏うのでなく剝き出しの姿であることを選ぶ子供の在り様だった。
しかも、子供は自分がなぜ追われるのかもわかっていない様子だった。
薄膜の外側に――夢でとはいえ――出て来られる人間など、それまで聞いたこともなかった。妖主である自分がそうなのだ。妖貴や妖鬼が知るはずがない。
それでも。
子供の放つ気配は人間のそれ以外の何物でもなく――その不可思議な輝きと魅力に、藍絲でさえ、ぞくりと震えるものを感じた。
まずい、と思った。
これは、このまま放っておけば、早晩眷属の手により散らされてしまう命だ、と。
冷静に考えれば、風変わりな人間の子供がどうなろうと、知ったことではない。そういう風に生まれ落ちた子供が不運だったというだけだ。
だが、その時の藍絲は、そう思うことができなかった。
最愛のひとを想って動いた先で出会った魂だったからかもしれない。

これも縁というものか。

窮鳥懐に入れば猟師これを撃たず——という、人間の世に伝えられる言葉が浮かんだのも面白かった。

最愛のひとが危険にさらされているかもしれないという恐怖から、まるでその子供が救ってくれたようにも思えて、藍絲は珍しく気まぐれを起こした。

綺麗な光と闇を纏う、小さな人間の子供。

この小さな命ぐらい、守ってやってもいいか、と。

人間の寿命など、自分たちにとっては瞬きにも満たないものだ——自分に安堵をくれた小さな魂に、それぐらいの礼をしても罰は当たるまい……そう思った。

だから、告げたのだ。

『窮した雛鳥が、わたしの胸に飛び込んできた以上、人間すら守る規則をわたしが破るわけにはいくまいね』

と——。

あくまで気まぐれの域を出ない、言葉遊びのような宣言。

それがまさか、今日の焦燥の緒となるとは、真実想像もしていなかった。

健気に自分を慕う魂を可愛く思う日が来るなど。

泡沫と知る、それでも至福の日々を味わわなければ、きっと知ることはなかった。

『兄さま、兄さま、兄さま！』

魔性のただ中に飛び込んだことも知らず、追われて怖がって、必死になって自分を呼んで――そうして現れた自分の懐に、出会った日と同じく、迷いもなく飛び込んでくる小さな人間を愛しいと想う自分が生まれるなどとは。

だが……まあ、それはいい。

その程度の変化は興味深いの範疇におさまるものだ。

問題なのは――そう、今藍絲を悩ませる根源は、また別のところにある。

「……さて、どうしようか、わたしの小鳥」

彼の脳裏にあるのは、彼に愛しさを覚えさせた少女に見えた翳りだった。

それは彼女の髪から輝きを奪い、その魂を曇らせるものだ。

愛するひとと添い合う未来を、最初から諦めていると言わんばかりの少女の心を蝕む翳り……彼女の本音ではない、だがそうするしかない彼女を包む現実が、彼女に強いる負担と損壊。

それらが、彼女から、自分の愛した輝きを奪う。

ならば、いっそ……いっそのこと。

揺れる心で藍絲は思う――自分が愛した美しい心。

自分を慕う健気な魂。

あれが曇り、自分の愛した魂が人間の世で生きることによって次々に損なわれていくのだとしたら……それが避け得ないことなのだとしたら。

あの日、無心で飛び込んできた魂を守ってきたのは、そんな未来を見るためではなかった。

徴をつけても手を出すことなく、ただ眷属を牽制して、彼女のことを見守ってきたのは——

彼女の魂がその生きる世界でぼろぼろに傷つくさまを見たかったからではない。

たとえ、彼女自身がそれを是としても。

「困ったな。わたしは到底肯じられないよ」

きみの髪から輝きが消え失せてしまうなど——。

愛しいと思った子供——その一生ぐらい、守りきってやれると思っていた。

だが、自分はあくまで魔性なのだと、その時藍絲は自らの性を思い知った。

自分が愛した者が、自分以外の何者かに損なわれるのを看過などできない。

それぐらいなら——。

自分で壊すか、閉じ込める——自分が愛した姿のままで。

この時、彼が選んだ道が後者であったのは、小鳥と呼ぶ子供への愛情が勝ったからかもしれない。だが、それが相手にとっての救いとなったか否かはまた別の問題だ。

※

翌日、違和感とともに目覚めたマーセルヴィンスは、寝台の上で声にならない悲鳴を上げた。
燦々たる朝日が射し込むその部屋に、彼女の落とす影はなかった。
彼女の魂が曇るのを止めるために、紫紺の妖主は迅速に仕事を為し、彼女から全ての影を一夜にして奪い取ったのだ――！

エピローグ

ひどいひと、ひどいひと、ひどいひと――！
ぷつりと消えた命の気配――同時に覚えた命の終焉。
「彩糸？　彩糸！」
すぐそばで、泣きそうな妹の声が聞こえる。
泣かないで――そう言って慰めたいのに、声を出すことができない。
ひどいひと……あなたは本当にひどいひとです、我が君。
気まぐれで愛玩した子供を、勝手な理屈で人形に変えた……こちらの心などお構いなしに。
『きみの魂があのまま弱っていくのを見るのは忍びなかったのだよ』
完成した人形のなかで目覚めた朝、初めて現実に会うことができたひとは、こともなげにそう告げた。
彼の目にする自分の姿だという人形に変えられたことで、一度封じたはずの恋は、最早不可

避の恋慕となって自分の心を支配した——自分にとっての創造主、絶対無二の人形師への愛情とともに。

逃げることしか、できなかった。

最愛のひとを持つ彼に、自分を見てと、愛してと懇願しないためには。

妹を守るという理由がなければ、それすらできなかったかもしれない。

そんな自分を、それでも彼は許したのだ——妹の魂がこの世にない間は、自分のもとへ帰っておいで、とそう告げて。

『わたしの最愛のお人形さん』

何より望む言葉は決してくれないくせに。

ひどいひと……そうして、あなたは今また勝手に命を終えようとするのですね。

数多の人形を道連れにして。

本当に、ひどい。

けれど、彩糸にもわかっている。それが魔性というものだ。自ら以外の支配を許さぬ誇り高い生き物なのだと。

そして、これもわかっている——彼は確かに彩糸の願いをかなえてくれたのだ。

『愛するひとと、生きるのがいいよ』

心に添わぬひとのそばではなく。
愛する妹のそばで、最愛のひとを想いながら——生きることを許されたのは、彼のおかげには違いない。
かなわぬ恋に心を引き裂かれ続けても、それでも心を偽り、仮面を被って生きていくより、ずっと幸せだったのだと、この時彩糸は思うことができた。
「彩糸！　しっかりしてちょうだい！」
妹の声が遠くなる。
兄さま——わたくしは一度でも伝えたことがあったでしょうか。
薄れゆく意識のなかで、彩糸は最初で最後の想いを告げた。
『わたくしは、あなたに会えて幸福でしたわ、兄さま』
届いたか否か、それは彩糸にもわからない。
真白の光が、意識を包みこむのを感じたのが最後。
彼女の世界から、全ての音は消えた——。

あとがき

この本が店頭に並ぶのは、寒さが最も厳しいころかと思いますが、みなさま、如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

破妖の剣『鬱金の暁闇』第十一巻をお届けします。

第九巻から続いた、璃岩城を舞台としたシーンに、今回一応の決着がつきました。

前巻ラストに登場した御方のせいで、復活してまださして間もないヒロインは酷い目にあわされて、しかもそれが継続中だったりしますが（笑）。

ようやく、璃岩城の外にいるひとたちを登場させることができました。

外ではあの後どんな騒ぎが起こったのか、その時皆はどう動くのか——これからまだまだ書くべきことは山積みですが、こつこつ書いていきたいと思います。

今回、登場の機会がなかったあのひとやあのひとたちにも、次回は登場してもらうつもりで

す。もちろんラスにはたっぷり頑張ってもらわなければなりませんが。

巨大な山は、まだ登り始めたばかりです。

ですが、ラストシーンだけはずっと昔から決まっているので、ひたすらそこを目指すばかりです。

最後までおつきあいいただければ幸いです。

さて、話は変わりますが、晩秋のころ、機会があって寒蘭の展示会に行ってまいりました。ずぶの素人で、花の善し悪しも何もわからない身ではありますが、愛好家の方々が愛情をかけて育て上げた蘭がずらりと並んだ光景には感動しました。

見事な花を咲かせるために、中には十年以上をかけたものもあるということで、クリスマスローズが時間がかかる（発芽してから、三年か四年目に花が咲きます）と思っている人間にはちょっと想像のつかない世界でした。でも、だからこそ綺麗な花を咲かせた時の喜びは一入なのでしょうね……即売コーナーもあったので、そこでお手頃価格の株を購入したのですが、果たして花が拝めるのは何年後になることか……気長に育てていきたいと思ってます。

野生の王国のような我が家の周辺に、ここ数年猪が出没するようになりました。タケノコも栗も、キノコ（毒キノコだけはしっかり残ってますが）に到るまで、全部猪が平らげてしまいます。しかも最近では家のすぐ近くまで来るようになったので、用心が必要です。

私を除く家族全員、猪の姿を見たらしいのですが、なぜか私だけ、猪の姿を目にしたことがありません。唯一（ゆいいつ）の接近体験は、真っ暗闇（くらやみ）のなかで「ぶひ」という、鼻を鳴らす音を立てて、ゆっくり遠ざかっていく足音を聞いたことぐらいです。

今回も、イラストの小島榊（こじまさかき）さんをはじめ、関係各所のみなさまには大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

それではまた、次巻でお会いできることを願って——。

平成二十四年　冬

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のＢ型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第９回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）11

COBALT-SERIES

2012年２月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

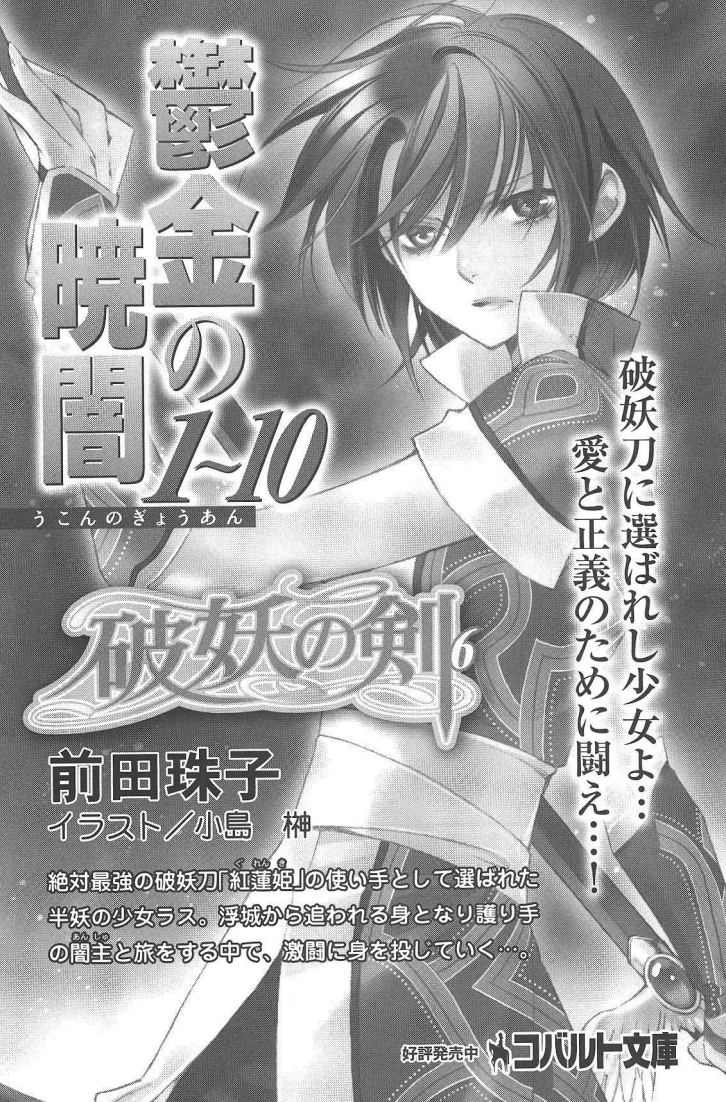
著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社　集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋２―５―10
(3230)６２６８(編集部)
電話　東京(3230)６３９３(販売部)
(3230)６０８０(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2012　Printed in Japan
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601604-9 C0193


禁断の闇金暁闇 1~10
うこんのぎょうあん
破妖の剣 6
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…！
前田珠子
イラスト／小島 榊
絶対最強の破妖刀「紅蓮姫」の使い手として選ばれた半妖の少女ラス。浮城から追われる身となり護り手の闇主と旅をする中で、激闘に身を投じていく…。
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超ファンタジーに酔いしれよ!!
言葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバフヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島 榊
好評発売中 コバルト文庫


まんが版
破妖の剣
二
～柘榴の影～
[漫画]松元陽
[原作]前田珠子
収録作品:破妖の剣
定価／420円(税込)
マーガレットコミックス
桜妃の仕掛けた精神攻撃により
甦るラスの過酷な過去
それとともに明らかになる
闇主との運命的な出会いは――!?
好評発売中!


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
狩人の宝
コバルト文庫
好評発売中


コバルト文庫
好評発売中
本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！
前田珠子
イラスト／明咲トウル
天を支える者
天を支える者1～4
天を支える者 古懸頃1～5
天を支える者 罠は、蜜の味
天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音



天命の王妃 占者は黒き影を追う

日高砂羽 イラスト／起家一子

近頃後宮では皇后と対立する劉徳妃が懐妊し、彼女の妹も入宮を狙っているという噂で持ちきりだった。そんな折、劉氏の邸で明霞と同じ占いをする男を見かけたという話が…！

〈天命の王妃〉シリーズ・好評既刊

天命の王妃 占者は未来を描く
天命の王妃 占者は光を放つ
天命の王妃 占者は龍の夢をみる
天命の王妃 占者は北風に惑う
天命の王妃 占者は愛を誓う

好評発売中 コバルト文庫



花嫁の選択
東で石は宝珠に輝く

小田菜摘 イラスト／池上紗京

夫アスライとサイ国に到着したイリーナ。アスライが総督に任命されたことは、次期皇帝に指名されるであろうことを示していた。しかし、国ではアスライに対する反発が強く…？

〈花嫁の選択〉シリーズ・好評既刊

花嫁の選択 銀の森の姫は風の大地に向かう
花嫁の選択 風の国の妃は春を忍ぶ

好評発売中 コバルト文庫



橘屋本店閻魔帳

永遠の愛を誓わせて！（上）

高山ちあき イラスト／くまの柚子

高札場に名を挙げられ、橘屋を恨む妖怪たちから狙われる身となった美咲。さらに、婿の弘人を離そうとする動きが…？　意外な人物の罠にはまった美咲は、絶体絶命の危機に！

〈橘屋本店閻魔帳〉シリーズ・好評既刊

花ムコ候補のご来店！　星月夜に婚礼を！
恋がもたらす店の危機！　恋の記憶は盗まれて！
ふたつのキスと恋敵！　海の罠とふたりの約束！

好評発売中 コバルト文庫



鏡の国の魔王

山本　瑤 イラスト／明咲トウル

人々の記憶から消えた「鏡の守護者」ティファニーは、夫である王太子シリンのもとを離れ、魔王と対決するためルーファスを出た。同じ頃、守護者が消えたルーファスに異変が!?

〈鏡の国〉シリーズ・好評既刊

鏡の国の女王陛下
鏡の国の王太子殿下
鏡の国の魔法使い
鏡の国の恋人たち
鏡の国の眠り姫
鏡の国の仮面舞踏会（マスカレード）
鏡の国の灰かぶり姫

好評発売中 コバルト文庫



裏検非違使庁物語 **姫君の妖事件簿**
愛別の歌をもう一度

長尾彩子 イラスト／椎名咲月

藤原家の女房から「姫君に憑いたあやしの花を祓って欲しい」と内密に依頼された椿木。
だけどその姫君とは、椿木の恋人・瑞季のお妃候補！　しかも、京きっての美少女で…？

〈裏検非違使庁物語 姫君の妖事件簿〉シリーズ・好評既刊

裏検非違使庁物語
姫君の妖事件簿 ふたご姫の秘密

裏検非違使庁物語
姫君の妖事件簿 第九皇子と二つの死

好評発売中 コバルト文庫



鳥籠の王女と教育係

恵みの環の花嫁

響野夏菜 イラスト／カスカベアキラ

隣国と開戦したエリアルダが再び魔王の守護を得るためには、ゼルイークが魔王になるしかない。しかし魔王になればエルレインと共に生きられない…究極の選択が迫り来る…!!

〈鳥籠の王女と教育係〉シリーズ・好評既刊

婚約者からの贈りもの
魔王の花嫁
永遠の恋人
姫将軍の求婚者
さよなら魔法使い
嵐を呼ぶ王子
恵みの環の魔王
魔法使いの選択
〈国守り〉の娘
夢で逢えたら
魔王の遺産

好評発売中 コバルト文庫



英国マザーグース物語

婚約は事件の幕開け！

久賀理世 イラスト／あき

大英帝国の首都・ロンドン。一年後に顔も知らない相手との政略結婚が決まっている子爵家の令嬢セシルは、結婚するまでの間に身分を隠し、男装して新聞記者になるという驚愕の行動に出た。そんな彼女の前に現れた謎の青年ジュリアンと事件を追うことになって…？

好評発売中 コバルト文庫

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作 **正賞の楯と副賞100万円**(税込)

佳作入選作 **正賞の楯と副賞50万円**(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚~105枚。
【しめきり】毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『cobalt』1月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**(読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚~350枚。
【しめきり】毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『cobalt』9月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt(2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売)をごらんください。

9784086016049

ISBN978-4-08-601604-9

C0193 ¥505E

1920193005059

定価 本体505円＋税



コバルト文庫

全魔性の新たな女皇「雛の君」は、現世界を完全に破壊し、次に創造する世界に人間は存在させないと断言した。それを阻止するため、永い眠りから目覚めたばかりの破妖剣士・ラスは雛の君と対峙しようとする。だがその時、ラスの弟リーダイルの身体に宿った父——金の妖主「王蜜の君」が二人の前に現れて…！ラスは実父と闘わなければならないのか…？残酷すぎる運命に立ち向かったラスは…!?